

南足柄市の金太郎

「金太郎」と言えば、「足柄山の金太郎」、そして「金太郎のふるさと」と言えば、神奈川県「南足柄市」です。

「金太郎のふるさと・南足柄市」の知名度は全国区であり、金太郎のイメージソング「童謡・金太郎」を知らない人はいないと思います。そんな金太郎伝説ゆかりの南足柄市ではこれまでに、金太郎シンボルマークの制定、シンボルマークの案内標識、金太郎歓迎塔、足柄金太郎まつり、大雄山線大雄山駅前の金太郎ブロンズ像など金太郎を積極的に取り入れてきました。そして最近では、童謡・金太郎の歌碑、金太郎力水、金太郎大明神、金太郎まさカリーパンなど、あらゆる場面で郷土のヒーロー「金太郎」を見かけることができるようになってきました。

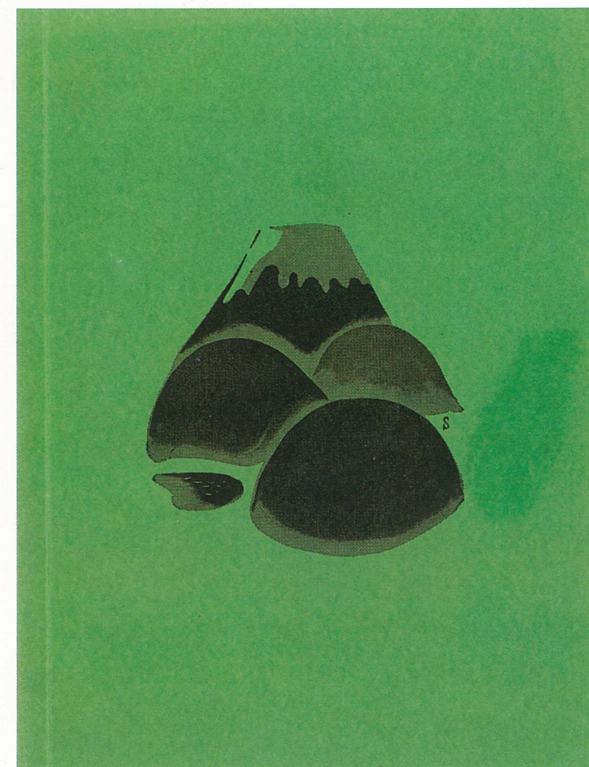


日本ボーイスカウト神奈川連盟 コミッショナーグループ  
平成23年3月作成

# 足がら山 物がたり

も く じ

- ヤトのまき
  1. 石のつぶて
  2. おとりのかご
- ジロップのまき
  3. 足あとを消しながら
  4. なわを回して
- ツキノワのまき
  5. 赤い花の悪ま
  6. 山つなみ



発行 ボーイスカウト日本連盟  
(昭和54年3月)

「足がら山物がたり」配布について

神奈川連盟では60周年記念にあたって資料集「源流を探る」を発行いたしました。カブ隊の指導者向けにはこの度、「足がら山物がたり」を配布いたします。日本連盟で絶版になった資料を復刻しても・・・また、この時代に冊子では・・・とコミッショナーグループも悩みましたが敢えて冊子にいたしました。最近、日本のカブスカウトのバックグラウンドが忘れ去られてきたこと、また、神奈川は足柄山のお膝元であることより多くの神奈川の指導者の目に触れて頂きたいのが配布の動機となっておりますのでご理解ください。

「カブ」って？ それは英語で動物（主に肉食獣）の子どものことです。

それでは「ウルフカブ」って？それはイギリスのカブ隊、創始者ベーデン・パウエル卿がボーイスカウト未満の子供達のために考案、文豪キプリングの「ジャングルブック」をバックグラウンドに誕生しました。戦後、日本にボーイスカウトが復活した当時、「狼」ではイメージが悪いということになり、「足柄山の金太郎」を下敷きに「足がら山物がたり」をつくり、その登場人物である、うさぎの「ヤト」、鹿の「ジロップ」、クマの「月の輪」が進歩章のシンボルとなったのです。集まったときにカブコールをするのも、組をデンと呼ぶのも、スカウトへ上進前のカブを月の輪と呼ぶのも、また、金太郎にまつわるカブソングが多いのもこのストーリーがあってこそ理解できるのです。

最後に我々コミッショナーグループの夢を披露します。この小冊子をカブスカウト隊の指導者がスカウトにお話ししていただき、各隊で現代にマッチした「新物語」または「続物語」若しくは「物語外伝」がスカウトたちの想像力で神奈川のカブ隊で誕生することです。期待しています。

日本ボーイスカウト神奈川連盟 コミッショナーグループ

ヤトのまき

1. 石のつぶて

今から千年も大昔の、天延という年号のころの物がたりであります。

広い広い大空の東から、春の日が、緑の風に乗って、あたたかい光を投げながらやって来ました。

ここは、相模の国と駿河の国とにまたがったあしがら山の高いいただきであります。

春が来たといっても、西の向こうに見える富士の山は、まだまっ白で、このとうげの山かげにも、のこりの雪が見られました。

その雪の上に、こじかの足あとを発見した金太郎は、

「ジロップの足あとだ——」

と、うれしくなりました。そして、その足あとをおって、尾根のうらまでやって来ました。そこからは、ふかい谷間で、谷そこには、酒匂川の上流が流れていて、岩の上を流れる水は、きれいにすみ切っていました。

その谷川の切り立ったがけの上には、大きな杉の林があって、南がわのけわしいがけぎわから、つばきの木が一本、枝を谷間へつき出すようにして、まっ赤な花を咲かせていました。

そして、このけわしいがけの、どこを、どうしておりたのか、こじかのジロップが……

コツン！コツン！

小づのの根もとを、つばきのみきへ、こすりつけていました。

金太郎の伝説地

南足柄市の伝説地は、足柄山中の山懐に囲まれた地蔵堂地区にあります。ここには古くから「四万長者伝説」がありその長者の娘・八重桐が産んだ子どもが「金太郎」なのです。この地蔵堂地区には「金太郎生家跡（長者屋敷跡）」や「金太郎の遊び石（かぶと石・たいこ石）」・「金太郎産湯伝説・夕日の滝」・「八重桐の腰掛け石」などが散在しています。そして地蔵堂のお堂の中には、「山姥像（金太郎の母親）」などが保管されています。



伝説のあらすじは概ね次のとおりです。

地蔵堂に四万長者がおり、その名前を足柄兵太夫と言います。この長者に八重桐という一人の娘がいました。八重桐は縁あって酒田氏に嫁ぎましたが、酒田一族の争いから逃れるため、地蔵堂の屋敷へもどり金太郎を産みました。金太郎が産まれた時に、屋敷近くにある夕日の滝の水を産湯に使用しました。こうして足柄山に金太郎が誕生し、やがて金太郎は人一倍元気に育ち、長者屋敷の庭石である「かぶと石」や「たいこ石」に登って遊んだり、「金時山」へ出かけたりして足柄山を自分の庭のように遊びまわり、山の動物たちもいつしか金太郎の遊び相手になったのでした。やがて金太郎は足柄山の怪童と人々から、うわさされるほどのたくましい青年に成長し、ある日、足柄山中にて源頼光と運命的な出会いをしました。そして頼光の家来として取りたてられ坂田金時と改名し、京の都へ上り渡辺綱・碓井貞光・卜部季武らとともに、源頼光の四天王の一人として大江山の酒呑童子退治をしたりして、その名前を天下にとどろかせました。その後、源頼光が亡くなると三ヶ月間、日夜、頼光のお墓参りをした後、都を去り、ふるさとの足柄山へもどり、その行方をくらましてしまったのでした。

狩りの歌 中村知 作詞・作曲

ジャン ドンドン ジャン ドンドン ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ  
 ジャガジャガドンドン ジャガドンドン カブ隊 あつまれ うさぎ うさぎ せっこうだ  
 しか しか おっかけろ りす りす でんれいだ くま くま まちうける くみうちだ  
 かりはすんだ えものはみごと カブの山は つきかげ はれて 光るつきのわ おおぞらに  
 ラン ラン ラララ ランランランラン ランランラン ラララン ウォウ ウォウ ウォウ

金太郎 作詞=石原和三郎 作曲=田村 虎蔵

- まさかりかっいで 金太郎(きんたろう) くまにまたがりお馬(うま)のけいこ  
 はいし どうどう はいどうどう  
 はいし どうどう はいどうどう
- 足柄山(あしがらやま)の 山おくでけだもの集(あつめて 相撲(すもう)のけいこ  
 はっけ よいよい のこった  
 はっけ よいよい のこった



ジロップ 井上 茂 作詞 中村 知 作曲

いたずら子じかの ジロップは流れの 水で ジャブジャブときれいに毛なみを あらったが

どろんごっこで どろまみれさあ たいへん しかられるピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

いたずら子じかの ジロップは小さい 角が うれしくてツバキの幹を こづいたら真赤な花が落ちてきたさあ たいへん そらにげろ ピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

いたずら子じかの ジロップはすました 顔して 森の道ひづめじまんで かけすぎて 足がら山へ 帰れないさあ たいへん どうしようピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

日本ボーイスカウト神奈川連盟 コミッショナーグループ  
 平成23年3月

しかのつのは、毎年春になると、去年からのつのがおちて、また新しいつのがはえかわります。ジロップも、つのおちる前なので、つのは根もとがかゆくて、そうしていたのでしょう。

だが、金太郎は、ジロップが、つばきの木に、いたずらをしているのだと思って、

「おーい、ジロップ、がけをおりてはあぶないよ、それに、そんなに立木をいためるものではない——早く、ここへ上がっておいで——」

と、しかるようによびかけました。

すると、金太郎だとわかってうれしくなったジロップが、思わず、げん気に大きくはね上がったので、かえって、

「コツン！」

と、つばきの枝へ、小づのを強くつき当てました。それで、つき出た枝のさきから、咲きほこった花の一りんが、ほろりとおちて……

ポトンと、水音を立てました。

そして、すきとおるような流れのうずを、くるくるまいながら、美しいつばきの花が、向こう岸の下手のほうへ、小舟のように流れて行きました。

その行手の、大きな岩かげに、なにか、黒いけものがあります。

金太郎は、けものを見つけて、ハッとしました。

「黒い山犬だな——」

そう思ってよく見ると、山犬ではありません。黒いけものは、太っちょで、後足だけ流れにつかって前かがみになり、岩と岩との間をのぞきこんで、右の前足を手のようにつかって岩あなへさしこみ、なにか一心に、とらえようとしていました。

が、そのとき、けもの足もとへ、花の小舟が流れて来ると、そのけものは、これを見てゆだんしたのか、うっかり右前足を、岩あなのおくふかくへ、さしこんだようです。

「いたいっ、いたいっ」

と、ベソ声を立てて、急に岩あなから、右の前足をひきぬき、人間のよう後足だけで、まっすぐに立ち上がりました。

「あっ、くまの子だ、月のわぐまの子だ——」

そうです。そのけもの前首に、白い三日月がたのむな毛が見えます。こぐまは、朝ごはんのごち走に、さわがにをとらえようとしていたのです。

こぐまは、ひきぬいた足の指さきを、いたそうにふってから、ペロペロなめ終わると、また、もとのように前かがみになって、こんどは、用心しながらまた前足を、そーっと、岩あなへさしこみしました。

が、あなのおくでも、子がにたちをまもって親がにが、青光りした大きなはさみを、ぐっとのばして、待ちかまえていました。

そして、こぐまの指さきへ、

「こぐまなどに、負けてたまるか——」

と、力一っぱいはさみつきました。

「いたたたたっ、いたい、いたい！」

こぐまは、さわがににはさみつかれたままの右前足を、いたそうにひきぬいて、さわがにをふりはなそうと、人間の手のようにぐるぐる、強くふりまわしました。

それで、さわがには、目がまわって、山や谷や流れまで、くるくるまわって見えます。

「助けてくれ——！」  
と、さげびましたが、頭のなか、クラクラッとして、耳のおくが、ジーンと、はげしく鳴って、なにもかもわからなくなっていました。

そして、ハッと、思ったときには、こぐまの指さきから、強くふりはなされて、ブーンと、半円けいをえがきながら投げとばされ……

バサッと、さわがにのおちたところは、大きなくりの木の、高い枝と枝との間に、まるく作られているりすのすでありました。

すると……

りすのすでは、思わぬお客のさわがにが、青みがかった大きなはさみを、ぬうーっとおし立てて、ブツブツあわを吹いているので……

「たいへんだ。たいへんだ——」

「天から、さわがにがふって来たよ——」

りすの家ぞくは、大さわぎになりました。

それだけでなく、りすの家ぞくは、いつもくりの木の、枝から枝へと、いそがしくかけまわる運動が、大好きのようです。でも、きょうは、いつもの運動どころではありません。

特に、りすの子どもたちは、まだ見たことのないさわがにの、かたい甲らを着た横ばいのすがたが、おそろしくておそろしくて、ただもう、あちらこちらへ、せわしくにげまわって、さわぎ立てました。

また、親子のなかにも、一ぴきのおく病者の父りすがいて、

「天から、さわがにがふって来た。さわがにの、おばけがふって来たよ——」

と、あわてふためいて、みきを下へかけおり、くりの木の根もとの、つみ石とつみ石との、小さいすき間へ、サッと、とびこんで行きました。

そこは、冬毛の白い野うさぎの一家が住んでいる石あなで、出入口は、やっと親うさぎが通れるだけの、せまいすき間ですが、石あなのなかは、野うさぎ一家の七わが、じゅうぶんくらせるだけの広さがありました。

野うさぎの家ぞくは、自分たちより小さい父りすには、だれもおそれはしませんが、

「天から、さわがにの、おばけがふって来た。おばけがふって来た——」

と、父りすが、そうぞうしく、さわぎ立てるので、野うさぎの父親がたまりかねて、

「りすのおとうさん、りすのおとうさん、もう少し、しずかにしてくださいませんか——」

そういって、ちゅう意すると、

「これが、しずかにしていただけますか。くりの木の高い枝にある私らのすへ——川岸に住んでいるさわがにが、しかも、天からふって来たのですよ。そのうえ、大きな青づめをふり立てて、ブツブツあわを吹いています——今に、おたくへも、そのおばけが、きっとやって来ますよ——」

「ハハハハ、りすのおとうさんは、さわがにが、そんなにおそろしいんですか——」

「ハハハハ、りすのおとうさんは、さわがにが、おそろしくておそろしくて、ならないんだって——」

「ワ、ハハハハ——」

野うさぎの家ぞくは、みんな一しょになって、父りすのおく病さをわらいました。

「でも、川岸に住んでいるはずの、さわがにが、天からふって来る——これは、かならず、おばけにちがいない——」

そうです。この気持は、金太郎にしても同じです。今度の流木は、ただの流木ではありません。ツキノワ親子が、乗っている杉の木、いかだ舟です。どうしても助けなければなりません。いくら、とく意のかけなわとは言いながら失敗すれば、なかよしのツキノワ親子が、深い滝つぼに落ちておぼれてしまうかも分かりません。

で、金太郎も、心で神様にご加護を願いながら、一心こめてのかけなわを、じーっとかまえて、こきゅうをはかって待ちました。

が、その間もないほどに、すぐ目の前へ、杉の木が流れて来ました。

そして……

「あっ、落ちる——」

と親ぐま達が、全身の毛を、一本残らずさかだたせた時、

すうーっ、かけなわが飛んで来て、へびが大口を開いて、えものに飛びついたように、ガクッと、ツキノワと一しょにいかだ舟、いや、杉の木の枝をとらえました。

が、そのはずみで、杉の木は、ぐるっと白いうずをえがきながら大きく向きを変えると、二ひきの親ぐまのしがみついている重い方が、滝の上から滝つぼの方へ、ぐっつき出てしまいました。

「しまった——」

そうつぶやいた金太郎が、あわててなわを手もとへたぐり寄せようとした時、どっど波打って来た大波のために、あっという間もなく、くまの両親は、高い滝の上から深い滝つぼの中へ、大きな水音をひびかせて、まさかさまにたたき落とされてしまいました。

で、金太郎は、すぐ岩かどに、かけなわのはしをもやいつけて、ハラハラさせられながら乗り出すようにして、ゴーゴーだく流の落ちる滝つぼをのぞきこむと……

泳ぎ上ずな親ぐま達だけあって、心配する間もなく、しばらくすると水底から、プクプククッと白い水あわを立てて、ぽっかり二ひきとも水面にうかび上って来ました。そして、フーと大きな息と一しょに、きりのように水をはき出すと、ぶるぶるぶるっと元気に二、三度身ぶるいしてから、こちらがわの岸へ向ってゆうゆうと泳ぎ出しました。

足がら山物がたり、ゆかりの歌および資料編

ぼくの名は金太郎

古田 誠一郎 作詞 山口 季次郎 作曲

1. チョロリ出たさわがに くまの子が つかめば 力いっぱいはさまれ こりゃ たまらぬと手をふる
2. 木の上のリスのす とばされた さわがに さかさまに飛びこむ こりゃ おどろいた たまげた
3. にげだした親リス うさぎのす 目がけてあわてころんでかけこむ こりゃ ここもみんなたまげた
4. すから出た 子うさぎ これを見た 大わし きつとにらんで飛びたつ こりゃ 今度こそあぶない
5. そこへ さっと 風切り とんできた 石ころ はねうたれ 大わし こりゃ かなわぬとにげ出す
6. 石投げた こどもは大声にさげんだ ぼくの名は金太郎 みんな なかよしに 遊ぼうよ

「うゝん、僕、大じょうぶだ！——山つなみなんぞ、少しもおそろしくないよ——」

と、元気にそう答えました。

それは、ツキノワのからだ小さいため、水のていこうが少ないので、流れる杉の木にまたがって、ゆ快でたまらないと言ったように、右の前足をふって見せて、ニコニコ笑っていました。

しかし、くまのなか間が、いくら、しかのなか間に負けな泳ぎ上ずなけものだと言っても、このはげしい流にのまれてしまっは、どんなに泳ぎのうまい父ぐまでも、思うように泳ぎ切る自信がありません。

それで、父ぐまは、

「水をあなどると、ひどい目にあうぞっ——子ぐまなんぞここで落ちたら、二度とふたたびうかび上れんから——」

と、丸い目を三角にむいて、大声でしかりつけました。

で、ツキノワも、四本の足に力をこめて、しっかりかじりついていました。そして、しばらくの間はげしく流されると、やがていかだ舟は、三びきのくまを乗せたまま無事に、流れのゆるい曲りくねりした川はばの広い所まで流されて来ました。

すると、ふいにツキノワが、うれしそうな声を張りあげて、

「あっ金太郎さんの畑だ——」

そう言って、左岸に見える丘を指さしました。

だが、この岸を、左にそって回れば……

「——すぐ滝だっ」

と、思ったくまの両親は、自分達親子に恐ろしい危けんの、だんだん近づいていることを知って……

父ぐまは、心のうちで、神様においのりしました。また、母ぐまも、口の中で、お念仏をとなえしました。

今は神仏におすがりするより外に助かるすべがありません。そして、ただそのご加護を信ずるばかりです。

ところが、子ぐまのツキノワは、あん外平気で、金太郎の家の方へ、だんだん近づいて来ると、せのびするようにこしを上げて、前足を手のようにふって……

「金太郎さん——！」

と、大声に呼んでみました。

すると、すぐ、

「金太郎さん——！」

こだまが、帰って来るのと同時に、

「ツキノワか——！」

と、金太郎の声が、曲り角の向こうから聞こえて来ました。

「あっ、金太郎さんだ。金太郎さんがいる——」

喜んだツキノワと両親が、短い首を出来るだけ高く上げて、下手の方をみると——金太郎が、流れの曲りかどの向こうで、滝のま上につき出た大きな岩の上に立って、真けんな顔をして、とく意のかけなわをかまえていました。

「これで、助かった——」

みんなそう思ったものの、父ぐまは、すぐその後から、心の中に、また、心配がわいて来ました。

父りすは、ほんとうに、さわがにのおばけだと思っているようです。

そのとき、こうさぎの一わは、おとなたちが、つまらないことをいつまでも、くどくどいい合っているの、ばかりしくなって、石あなから外へとび出すと、川岸づたいにわか草の上をピョンピョンはねて行きました。

すると……

谷川の流れにつき出た大きな岩の上で、つばさを休めながら、するどい目を光らせて、え物をさがしていた大わしが、こうさぎを見つけて、

「しめしめ、朝めしのさかなが、わざわざ自分のほうから、ピョンピョンやって来た——」

と、大きなはばたきの音を立ててとび立ち、するどいくちばしをとがらせ、ぐっと足のつめを開いて、ただ一つかみにしてやろうと、おそいかかって来ました。

で、こうさぎは、そのおそろしさに、早や気をのまれてしまって……

「おかあさん——」

助けをよぼうと思っても、のどから声も出て来ません。ぶるぶるふえながら、その場へすくんでしまいました。

また、近くの岩かげで、さわがにをさがしていたくぐまも、強いはばたきの音を聞いてふり向き、大わしのすさまじいあり様を見て、

「ぼくのほうは、大わしがとんで来ませんように——」

と、両目をつぶって、ガタガタふるえていました。

が、そのとき、

向こう岸から、あっという間もなく、石のつぶてが、

ヒュー！ と、矢よりも早くとんで来て、大わしのつばさを、ハッシと、たたきつけたので、パラッパラッと、はねが七、八枚、空中へとびちりました。

こうさぎは、さあ、この間にと、ピョンピョンはねて……

「おかあさん！大わしが——」

と、一生けんめい、せまい出入口から、石あなのなかへにげこみました。

大わしは、おそろしい目を、ギョロッと光らせて、

「だれだっ——鳥の王様の、このおれ様に、石を投げつけるとは——」

そういつて、石のとんで来たほうを、ぐっとにらみつけました。

だが、なにを見つけ出したのか、急に、げん気がなくなって大わしは、バサッバサッとつばさをひる返すと、遠く東にそびえて見える丹沢山のほうへ、すぐすごにげて行ってしまいました。

それで、こうさぎは、岩のすき間から、大わしのとび去ったのを見て安心し、みじかいしっぽをちぎれるようにふりふり、石あなのなかから出て来て、うれしそうに赤い目をくりくりさせて、

「だれが、ぼくを助けてくれたんだろうか——」

と、ひとりごとをいって、ふしぎに思いながら、向こう岸をながめました。

すると、向こう岸の、つばきの木の下で、一びきのこじかが、前足で、トントントンと、地面をたたいて喜びながら……

「やーい！弱い者いじめの、大わし、足がら山にやって来ると、ぼくとなかよしの、金太郎さんがいるんだから——」

と、強がって、大きな声でさげびました。

この声に、こぐまも、まるい耳を立てて、岩かげからはい出し、そーとながめると、こじかの後に、自分のようにまるまる太った人間の子どもが、ニコニコわらって立っていました。

「何者だろう——ぼくのように——後足で立っているぞ——」

人間の子どもを、はじめて見るこぐまは——毛のみじかいからだに着物を着て、くまのように二本足で立って、大きなまさかりをかついでいる金太郎に、目を見はっておどろきました。

だが、こぐまは、人間の子どもの、弱い者をいたわって助けてくれたやさしい心に、感心して好きになりました。そして、こじかのように友だちになりたいと思いましたが、谷川の流れがふかくて急だし、向こう岸のがけもけわしいので、こちらからわたって行くことができません。

で、どうしたら、向こう岸へわたることができるだろうかと考えていると、

コーン！コーン！コーン！

と、谷に、こだまがひびいて……………

人間の子どもが、大まさかりをふるって、高い大きな杉の木の、根もとを切りはじめました。

そして、根もとを八、九分通り切りこむと、今度は、両うでに力をこめて……………

「うーん、うーん——」

まっ赤な顔になって、杉の木を谷間へ、おしたおそうとしていました。

それで、また、いきをのんで見ていると、

メリッメリッメリッ！！

はげしいひびきとともに、ついに杉の木をおしたおし、向こう岸からこちらの岸へ、どすん！！と、物すごい地ひびきを立てて丸木橋をかけました。

で、このおそろしい力を見て——こぐまも、こうさぎも、こじかまでもが、目をまるくしておどろきました。

また、野うさぎやりすの家ぞくをはじめ、あたりに住んでいるけものたちは、大きな地ひびきに地しんかと、みんなあわててすのなかから、われさきにとび出して来ました。

こぐまは、今まで、この山でいちばん強い者は、自分の父ぐまだと思っていました。それは、森のきつねでも、山のいのししでも、父ぐまの一とたたきで、たたきたおされてしまうからです。

でも、あの、大杉の木を、ただ一人で根もとから、おしたおした人間の子どもの、大力には、父ぐまでも、とうていかなわないだろうと感心していると、

タ>ッタ>ッタ>ッ……………

と、すぐ、こじかが、とく意のひづめで、丸木橋を、こちらの岸へわたって来ました。

そして、あたりを見まわしながら……………

「おーい、みんな、集まっておいで——この山で一番力持ちの金太郎さんだ。みんなと友だちになりたいってー」

と、大声でよばわりしました。

が、けものたちは、こじかの後から、二本足で丸木橋をこちらへわたって来る金太郎が、ピカピカ光る大きなまさかりをかついでいるのを見ると、みんなおそれて、すぐにはだれも、近づいて行こうとはしません。

それで、こじかは、また……………

「なにをおそれているんだ。金太郎さんは、やさしい人だから、みんなをかわいがってくださるよ——さあ、早くよっておいで——」

めを、今にも、たたき取ろうとした時でありました。あやまって岩の上から流れの中へ、ジャボンと落ちて、

「冷たいっ——」

と、さけんだ自分の声で、思わずゆめが覚めました。

が、それは、ねどこの上から、岩屋の中まで流れこんだく流へ、ころがり落ちていたのです。

で、あわてて、すぐ、だく流からはい上ると、その時、ふいに、

「さあ！みんな、向う岸へ逃げるんだっ——」

と、命令するような、父ぐまの、ど鳴る声が聞こえました。

おどろいたツキノワと母ぐまは、あわてて父ぐまの後から、その行手の、あちらこちらにたおされた立木を、もどかしそうに飛びこえたり、くぐったりして、丸木橋のたもとまでついて行くと、こちらがわの岸にかかっていた杉の木の先が、もう半分大水にういてしまって、岸からはなれそうになっていました。また、向う岸の根もとの方も、わじかにみきが、根もとにつながっているだけでありました。

「この丸木橋を渡るんですか——」

母ぐまが、不安そうにたずねると、父ぐまは、急がしそうな口ぶりで、

「そうだよ、丸木橋を渡って、ひのき山へ逃げるんだ——」

と、はっきり言い切るので、

「でも、こんなになっているのに、渡られるんですか——」

まだ、母ぐまは心配そうです。すると、父ぐまが、元気づけるように……………

「なあに、これでも、渡れんことはないだろう。いつまでも、こちらの岸にいと、すぐ今に、山つなみがおし寄せて来て、みんな流されてしまう——」

父ぐまは、そう答えると同時に、ジャボンと水音を立てて、うきかけた丸木橋に飛び乗りました。

それで、続いてツキノワが、そして、最後に母ぐまが、おそろおそろ飛び移ると、その重さで、ポキッ！と、杉の木の、根もとのつなぎ目が切れてしまって、切れ目のはしが、向う岸のがけを、ガリガリガリッとけずるようにして、ザブン！と、大きな水音を立てました。

これで、もう、杉の木は、丸木橋ではありません。一本の流木、いや、いかだ舟になってしまいました。

すると、ちょうど、その時、川上から、せきを切ってあふれ出したこう水が、立木も岩もなにもかも、ゴーゴーおし流しながら、どっと一度に流れて来ました。

「うわあ——！」

「山つなみだぞ——！」

親子のくまが、あわてふためいているうちに、だく流におし流されたいかだ舟は、ものすごい速力で、川下へ川下へ走り出しました。

で、三びきのくまは、あまりのおそろしさに、ただ、もう、む中で、杉の木のみきと枝とに、一生けん命しがみついていたのですが、それでも、母ぐまは、自分のことよりも、かわいいツキノワが心配で……………

「しっかりするんですよ——足のつめをはずすと、波にさらわれてしまいますから——」

と、大声を張り上げて、そう注意しましたが、ゴーゴー流れのひびきが高いので、はっきり聞き取ることが出来ません。

が、ツキノワは、とっさの感じでそれが分かったと、

と、子じか達は、三日間の長雨で食べ物らしい食べ物は、少しも食べていませんから、すぐ、飛びつくように、かごの周囲へ集まって来ました。

すると、母じかが横から……………」

「おぎょうぎよく、みんなでいただくんですよ——」

と、子じか達をたしなめました。

それで、ジロツポもみんなと一しょにぎょうぎよくいちじくをごち走になりました。

そしてしばらく、うす暗い小屋のすみずみまでよく見回していましたが、とつ然

「ヤトだっ、ヤトがいる——」

そうさげびながらもジロツポは急にうれしくなりました。

それは、心配していたヤトが、この小屋のすみの方で、しき草の上でねていたからです——山火事で弟うさぎを救ったヤトは、やけどの手当てをしてもらって、そこにねていたのです。そして、弟うさぎ達も、みんな無事らしくそばにいて、初めて見る野じかの大きいからだ、ことに父じかの太づのを見て、かわいい赤い目をパチクリさせていました。

そのころ——金太郎は、滝の、すぐ上手の岩の上に立って、あらしにたおれて流れて来る立木をのけようと、大雨に打たれながら流木よけの仕事に励んでいました。

もしも、滝の上手の岩々にじゃまされて流木の山ができる、川の流れがせき止められて大水が横へ切れてあふれ出し、自分達の畑も家も、こう水のためにおし流されてしまいます。

で、金太郎は、じょうぶなふじづるでなつなを使って、とく意のかけなわで流木を引き寄せる仕事に、一生けん命働いていたのです。

だが、工作中でも友達のことを——ヤト達は、助けてやって小屋にいるし、ジロツポの家族も少し前に、流れをこちらの岸へ逃げて来て、丘へ登って行ったのを見たから心配ないが、ツキノワは、どうしているだろうか、仕事に励みながらも、心の中では、そのことばかり気にかかってなりません。

ところでその川上では……………」

第一にささぐまの土あなが、次にしまへびの石あなが、そして、きのうのま夜中ごろからは、野うさぎの石だたみまで、すっかり大水につかってしまって——みんなは、びしょぬれになったまま峠(とうげ)の上へ上へと逃げて行きました。

また、小鳥達のすも大雨に打たれて、枝からたたき落されて流れて行くものが、数え切れぬほどありました。

で、くりの木の、枝と枝との間に作られたりすのすも、二日目から雨もりで、ピチャピチャぬれて弱っていましたが、その木の太いみきに大きなうつろがあったので……………」

「さあ、こんな時には、ここへひなんするにかぎりますよ……………」

と、りすの家族は、みんなそこで、この長雨をさけることにしました。

ところで、くまの岩屋では、きのうの夕方から山つなみをけいかいしていた父ぐまが、一晩中ねむらないで、ねむたい目を無理に見張って、あちらへのそりのそり、こちらへのそりのそり、岩屋の門前をなん度も行き来して、水の番をしていましたが、母ぐまは、ツキノワがおととい、くりの木から落ちてからまだねていたの、岩屋の中で外へも出ずに、ツキノワのかん病のために付き切っていました。

それで、ツキノワは、大雨のひびきを子守り歌のように聞きながらスヤスヤねむってしまって——谷川でやまめを取っているゆめを見ていました。そして、きれいな流れをスイスイ泳ぎ回るやま

そういつてくれたので、第一番に太っちょのこぐまが、流れの岩かげからノソリノソリ岸へはい上がって来ました。そして、金太郎の人のよさそうな目を見ると、まさかりのこわさもわすれて、

「ぼく、なかよしになりたいんだが——」

と、なかま入りを申しこみました。

すると、こうさぎも、金太郎の足もとへ、ピョンピョンはねて来て、

「ぼくも、友だちにしてください——」

と、ていねいに頭をさげてたのみました。

で、金太郎は、大まさかりを立ち木に立てかけて、ニコニコしながら……………」

「ぼくの名は金太郎、こじかの名はジロツポ、どうぞよろしく——これからは、みんな、なかよしになろうなア——」

そういつて、あいさつをしましたが、こぐまにも、こうさぎにも、名前がありませんから、たゞ目を、パチクリさせていると、金太郎が、しまったといった顔つきで……………」

「すまない、すまない、君たちには、まだ名前がついていないんだなア——、では、ぼくが、よい名前をつけてやろう——こぐまをツキノワ——こうさぎをヤトとよぶことにしよう——どうだ、よい名前だろう——」

「ぼく、ヤトだって——」

こうさぎには、名前の意味がわかりません。で、金太郎は、これをせつ明するように……………」

「そうだよ、君は、野うさぎだから、ヤト(野兎)じゃないか、そして、こぐまは、月のわぐまだから、そのままツキノワとよべばいいよ——」

「ぼくの名前、ツキノワか、きれいな名だが、だれよりもいちばん強そうな名前だなア——」

こぐまは、大よろこびです。

すると、そばから、こじかのジロツポが口をはさんで、

「ぼくは、二才じかだから、次郎っぼ——ジロツポという名前なんだ——」

そういつていると、金太郎が、二、三ぼ前に進み出て、まじめな顔つきをして……………」

「だが、名前が、どんなによくても、いたずら者の集まりではこまるから、みんなよい子になるように、一つここで、やくそくしようじゃないか——」

「よい子になるやくそくだって？」

ヤトには、また、わからなくなりました。

「どんなやくそくを、ぼくらはするのかなア」

ツキノワにも、よい子になるやくそくがわかりません。

すると、ジロツポが、先ばいらしい口ぶりで……………」

「ハハハ——君たち、あまり、むつかしく考えることはないよ——ぼくたちのやくそくというのは、みんなで助け合って、山や森のくらしをたのしく、いつもげん気にやろうということなんだ——」

と、よくわかるように教えてくれました。

## 2. おとりのかご

長い冬の間、はい色にくすんでいた足がら山の、山はだは、春の声を聞くと、急に尾根も谷も、一面に美しく、うすみどり色にぬりかえられました。

そして、日当たりのいい尾根の南がわで、山つつじのかたいつぼみが、あたたかい光にふくらんで、白い花びらを開くと、うら山の、じめじめしたさわのほとりでも、いちりんそうと、ふたばあおいが、うすむらさきと、べに色の、かわいい花をさかせました。

また、ひのき林のなかでも、高い木にからみついている山つぐみの、赤い花が、にっこりとほほえみしました。

それから、川の水もぬるんで、春もなかばごろになると、谷川のつつみの上に、大きな葉っぱを広げている富士あざみが、むらさき色もあざやかな花を開きました。

そして、また、しばらくたって、野うさぎの石あなのある大くりの木のまわりでも、みどりにもえる草原に、き色い花のきれいなまんねんぐさと、むらさきの花の美しいたつみそうが、もう、すぐ、長雨のつゆがやって来ることを予言でもするように、あたり一面にさきそろいました。

こうして、いろいろな花が、つぎつぎに、さきかわるごとに、山の動物も、きせつのうつりかわりを知ることができました。

野うさぎの家ぞくは、小さいはこべの花が、みどりの草むらのなかに、黄色い花びらをのぞかせるようになったころから、毎日毎日、石あなから飛び出して、草と花のにおいに包まれながら、はねたりとんだり、また、親うさぎは、子うさぎたちに、てきからにげるための方法と、うさぎのしゅうかんやくらし方を、だんだん教えていきました。

そうです。うさぎは、ほかのけものと、あらそうことをこのみません。もしも、おそろしいきに出会った場合には、すぐに、物かげや草むらにかくれて、ジグザグと風しもの方へ大まわりして、あい手の思いもよらない所から、鳥の飛ぶような早さで、自分たちのすへにげて帰ります。

ある日……

子うさぎのヤトは、あまり遠くのほうまで、まわり道し過ぎて、つかれてしまったので、しばらく休んでいこうと、しゃくなげの木の根もとで、うすべに色の花をながめていると、つゆ空は、急に雨になって、ポツリポツリふってきました。

いくら、子うさぎのヤトでも、だんだん大きくなって来たので、しゃくなげの花の下では、雨やどりできません。それに、つゆ時の雨は、ふり出すと長引くので、いそいで石あなへ帰ろうと、花の下から雨の中へ出てみると、いよいよ本ぶりになってきました。

で、ビショビショどろんこになりながらはねて帰ると、その帰り道のおかの上に、ぐっしょり雨にぬれたひめゆりが一本、ふくらんだつぼみを、今にも開こうとしていました。

つゆの雨は、草木にとっては、めぐみの雨ですが、野うさぎたちは、雨のなかでは、運動も草かりもできません。それで、石あなのなかにとじこもって、雨の晴れる日を待っていました。

しかし、こんな間にも、さわのほとりや林の日かげの、ごみごみしている場所では、さなぎのなかから、新しい虫のなかまがうまれていました。

やがて、つゆがあけると、すぐ、山は夏です。青々とせだけをのぼした草のなかから、ほたるぶくる、やぶむらさき、つりがねにんじん、そして、ききょうが、うすむらさきの花を見せてくれました。

また、ふかい草むらのなかでは、ばった、つゆむし、きりぎりす、かまきりなどが、草色をした自分たちのからだでは、だれにも見つかるまいと安心して、とんだり歌ったり、大さわぎをしていました。

だが、それも、夏の間だけのできごとで、だんだんかれはじめた草むらのかげで、すずむしやまつむしが、さびしい声で鳴き出すようになると、あのおかにもこのおかにも、おみなえしのき色い花が

ができません。

「——これじゃ仕方がない。みんなで泳ぐことにしよう。流れが早いから、ななめ横に川下の向う岸へ、流れに流されながら泳いで、金太郎さんの家のある丘へ逃げよう——」

そう、父じかが教えると、母じかも賛成して……

「それが一番安全です——私は、子ども達の後から泳いで行きますから、おとうさんは、先に泳いで下さい——」

話が決まって、父じかが、最初にだく流へ飛びこむと、続いて子じか達も、ジャボンジャボンと飛びこみました。そして、最後に母じかが流れにはいつて、みんなで用心しながら流れに乗って泳ぎ出しました。

が、子じか達は、こんな強い流れを泳ぐことは、生れて初めてですから、みんなヒヤヒヤしながら泳いで行きました。

その様子を見て母じかは、後の方から……

「——水を飲まないよう頭をあげて、元気に泳ぐんですよ。流れに負けてはいけません。四本の足を休ませず、交代に働かせて流れをかくんですよ——しかのなか間は昔から、泳ぎにかけては、どんなけものにも負けたことはありません——だから、お前達もしっかり泳ぐんですよ——」

と、大きな声で、声えんしました。

そうです。母じかの言う通りです。しかは泳ぎが、他のけものよりも達者で、遠い海を島から島へ、楽々と泳ぎ回る大じかさがあります。それで、ジロップも初めの間は、少し水を飲みましたが、母じかの声えんで父じかの後に続いて、どの子じかよりも早く、向う岸へ渡り切ることが出来ました。

それで、ジロップは、うれしくてうれしくて、父じかよりも先に立って、飛ぶように丘を登って金太郎の家へかけて行きました。

が、金太郎のすがたは、家のどこにも見当りません。で、がっかりしていると、野じかの家族もみんなやって来ました。

すると、その足音を聞き付けた金太郎の母が、家の中から出て来て……

「——みんなも、達者でよかったね、金太郎は今、滝の上手で仕事をしていますが、お前達は、山つなみの終るまで、ここにいる方が安全ですよ——」

と、やさしくいたわりながら、野じか達を裏の小屋へ連れて行きました。

そして、かわいた布を出して来て……

「まあ、こんなにぬれて、これでは、けものでも病気にかかりますよ——」

そう言って、野じか達のぬれたからだを、すっかりきれいにふいてやったので、父じかも母じかも、うれしそうに金太郎の母へ、からだをすり付けて来て、前足でトントン地面をたたいて……

「ありがとうございました——」

と、感謝の喜びを表わしました。

で、子じか達も両親を見習って、しかの習性であるトントンと、みんな前足で地面をたたいて喜んで……

「この大雨では、みんなも食べ物がさがせないから、おなかがすいたことでしょう——」

金太郎の母は、そう言いながら、よくじゅくしたいちじくの実を、大きなかご一ぱい重そうに出してくれました。

「ごち走だなア——」



「あっ僕らの岩屋だ——」

と思ひながら、岩屋の外をながめると、今までに、まだ見たことのないような大雨で、あらしは、立木も吹き飛ばすような勢いで吹きなぐっていました。そして、雨水が急流のように、ゴーゴーひびきを立てて、今少しで岩屋の中まで、流れこみそうな水かさになっていました。

それで、ツキノワは、心配になって来て、そばにいた母ぐまへ、

「おかあさん——」

と、言ってだきつくと、母ぐまも、ツキノワをだきかえして……

「よかったね、よかったね——もう少しでお前は、かみなり様に、打たれてしまうところだったんだよ——」

と、教えてやると、ツキノワは、聞きただすように……

「かみなり様、くりの木へ落ちたの——」

そう言って、目を丸くしましたが、母ぐまはすぐ、それを打ち消して……

「いえいえ、くりの木は助かりましたが、そのとなりの三本杉にかみなり様が落ちたので、一番高い杉の木が、まっ二つにひきさかれて、まっ黒く焼けこげてしまいましたよ——」

「えっ、あの一番高い杉の木に——」

ツキノワは、もしも、杉の木に登っていたら、かみなり様に打たれて死んでしまっただらうと思うと、ぞっと寒気がして、短い首を、一そう短くちじめました。

そして、また、そーっと首をのばして、今度は、岩屋の出入口の方へ目をやると、そこには、この山で一番年かさだと言われる父ぐまが、いつもとちがってむっつりとした顔付きで、大空一面にまだ、まっ黒くおおいかかって、なかなか去りそうもない雨雲をながめていました。

が、ツキノワの目を感じると、ひとりごとのように……

「ひょっとすると、山つなみになるかも知れんよ——そんな時には、丸木橋を渡って、峠（とうげ）の一番上へ逃げるんだなア——」

そう教えるように言ってから、また、心の中で、逃げる時の計画を立てていました。

それは、けもののかんで、いくら日照り続きの後でも、こんな大雨が三日も降ると、山つなみがやって来て、森も林もみんな、だく流にのまれてしまうことを、父ぐまは、もうなんべんも経験しているの、いやになるほどよく知っていたのです。

風は、少しやみましたが、足がら山に降り続く大雨は、きょうでちょうど、三日目の朝をむかえました。

そして、だく流におし流されて、つつみの一部がくずれると、そこからあふれ出した大水は、初めは、白波を打って流れていましたが、だんだん広い地面一ぱいに広がって、野じかのすも、いつの間にか、油のにじみこむようにこう水につかってしまいました。

で、父じかは大声に……

「さぁみんな、私について来るんだ——だが、あわてると、足を水に取られるから、用心して歩くんだよ——」

と注意して、家族を連れて雑木林まで出て来ると、あらしのために立木が、あちらこちらにたおれていました。そして、そこも、深い落葉がういてしまっていたので、たおれた立木を飛びこえながら、落葉の上を浅せを渡るようにして通りぬけ、少し川上で、水のあふれ出していない高いつつみの上へ登っていきました。

が、川原は、見わたすかぎり一面に水があふれて、川の流れが深いので、どこから歩いて渡ること

さいて、ふかいふかい谷ぞこの、岩間のところどころに、あきちょうじのうすむらさき色をした花が、ちらほらすようになります。また、すみわたった青空に、さわやかな風がふいて、ゆらゆらすすきのほが、しずかにゆれていました。そして、そのころになると、足がら山にも、実のりの秋がやってきます。

で、大きりの木の枝々にも、くりの実が一ぱい、すゞなりに実のりしました。

足がら山に秋がきた

き色い月にてらされて

みんなわになれうさぎの子

ペッタ、ペッタン

ペッタ、ペッタンもちつきだ

ちょうしあわせてきねつこよ。

(曲譜スカウティング誌五七号一頁)

うさぎのなかまは、大昔から月を、神様だと、うやまっていました。

それで、ヤトは、もう、ぽつぽつ冬毛にかわろうとしている着物を、きちんと着て、お月様をていねいにおがんで……

「ことしはどうぞ、くりの実が、ぶじに取入れできますように——」

と、おいのりをしました。

それは、毎年、この月のまん月が、三日月がたにかけはじめると、となり山の矢倉岳から、いたずらざるが数十ぴき、むれを組んでおそってきて、大きりの木の、くりの実を、一つのこさずさらっていくので、大きりの木のまわりに住んでいるりすや野うさぎや、その他のけものたちは心配で心配で、毎日毎晩集まっては、どうしたらよいだろうかと、山ざるをおっばらうそうだんを続けていました。

そこで、今日も、おしゃべりの父りすが、第一番に口を出して……

「うさぎさん、うさぎさん——あんた方は、私たちとちがって、山ざるにもまけないほどからだが大いから、一つ、ことしは、さるどもとたたかってくださいませんか——」

と、いうので、父うさぎが、野うさぎの家ぞくを代表をして、

「でも、私たちは、平和をあいしていますから、そんなぼう力は、きらいです——山ざるだって話し合えば、なんとかうまく、話し合いができると思うのですが——」

と、父うさぎは、どこまでも平和に話し合いをしようという意見です。

だが、父りすは、小さいからだを、むりに大きく見せながら……

「話し合いですむなら、とっくの昔に、話がついているはずですよ——では、仕方ありません。くりの木のまわりに住んでられるみなさん——いよいよ、山ざるどもとたたかわねばなりませんぞ！」

と、からだより大きいしっぽをふりふり、からげん気で、しかも早口で、そうさげびました。

すると、他のけものなかから……

「じゃあ、私らは、きのぼりができないから、木のぼりじょうすなりすのおとうさんに、一番がけをやってもらったらいいじゃありませんか——」

と、からかい半分に、大きな声でさげぶ者がありました。

これには、父りすもおどろいて、こんどは、ちぢかまるようにしっぽをまいて……

「いえいえ、わたしらは、こんなにからだ小さいから、一番がけなんぞ、とんでもない、とんでもない——」

と、だんだん小さい声で、つぶやくようにいいながら、後ずさりしてかくれてしまいました。

こんなことでは、いつまでたっても、話し合いができそうもないので、きょうもまた、話がまとまらないうちに、みんなは帰ろうとしました。

すると、そのとき、みんなの前へ、ヤトがピョンピョンはねて出て…………

「みなさん、待ってください。——ぼくは、このとうげで、矢倉山の山ざるを、こらしめてくださる方は、金太郎さん以外にはないと思います——」

と、自信ありげに発げんしたので、みんなも思い出したように…………

「そうだった——金太郎さんのことをわすれていた」

「そうだ。そうだ——」

「金太郎さんに、助けてもらおう——」

「こんなときには、人間の力をかりるにかぎりますよ」

けものたちは、金太郎が、ただ一人で、長い丸木橋をかけたことを知っていたので、みんな口をそろえて、ヤトの意見にさんせいしました。

そして、みんな口ぐちに…………

「すみませんが、こうさぎさん、あなたから、金太郎さんに、おたのみしてくださいませんか——」

「みんなを助けると思って、金太郎さんの家へ、たのみにいってくれませんか——」

そういって、ヤトにたのみましたが…………

ヤトは、まだ金太郎の家へいったことがありません。でも、金太郎にたすけてもらわないと、ことしも山ざるのために、くりの実を一つのこさず、みんなさらわれてしまいます。

で、ヤトは、金太郎が来るのを待っていても、いつのことかわからないので、こちらから金太郎の所へ行くことをけっ心しました。それは、丸木橋を向こうへわたれば、金太郎か、ジロツポの足あとが、のこっているだろうから、その足あとをおって行けば、金太郎の家へ行き着くだろうと思ったからでありました。

そして、丸木橋のなかほどまで、ピョンピョンはねて行きましたが、山のぼりでは、ジロツポに負けないヤトも、丸木橋の上から、ふかい谷川を見おろすと、足がすくんでしまって、もう前へも後へも、はねることもとぶこともできません。

そして…………

「しまった——」

と、思ったときは、足をすべらして、でんぐり返って、急流へおちていました。

さあ、たいへんです。

ヤトは、まだ、およぎを知りません。流れにのまれて水のみ、いきもつまりそうです。もがきにもがいて、流れを前足でかき、水を後足でけると、やっと顔だけが、水面にうかびあがりました。だが、少しでもゆだんをすると、すぐ頭からずんでいきます。

で、一生けんめいに四本の足に力をこめて、水をかいたり、流れをけったりしていると、顔もうかんで、少しづつ前へ進んでいくような気がしました。

それで、また、げん気を出して、向こう岸へおよぎ着こうとしましたが、水のつめたさとつかれとで、足の自由がきかなくなって流れにのまれ、ついになんにもわからなくなってしまいました。

すると、また、母うさぎが、

「無事に逃げたものなら、とっくにこちらの岸へ、帰って来ているはずじゃありませんか——」

と、なじるように言いました。

だが、この言葉を聞いて父うさぎは、ようよう子うさぎ達の、帰って来ないわけが分かったように…………

「ハハ、——こちらへ逃げれば風下だから、赤い花の悪まに、みんな食われてしまうじゃないか——そうだ。きっと、子うさぎ達は、風上の向こうの方へ、うまく逃げているにちがいない。そして、赤い花の悪まが、消えてしまってから、ゆっくり帰って来るつもりなのだろう——」

そう言われて、始めて母うさぎも、そして、言った父うさぎまでもが、少し心が落ち付いて来ました。

と、思っていると、そのそばから、親子すの一ぴきが、口をはさんで…………

「子うさぎさんのことも心配でしょうが、今となってはそれよりも、われわれの方が、早くこゝから、引越しておかないと——なんと言っても、命あつての物種ですからなア——」

そうしゃべりながらも、おく病者の親子すは、山火事がおそろしくておそろしくて、大きなしっぽを小さく細めて、カチカチはを鳴らしながらふるえていました。

が、父うさぎは、こんどは、思いの外元気そうに…………

「いや、そんな心配はいりませんよ——どんなに大きな赤い花の悪までも、この谷川だけは渡れないと思いますから、もっと落ち付くことが大切です——それに、なるべくここにおいてやらないと、子うさぎ達が、帰って来た時に心配しますからなア——」

最前から、こうした話しを聞いていたツキノワは、これで自分も安心しました。それで、子どものおそろしい物見たさに、もっとはっきり火の手をみようよと、大くりの木の中ほどまで、元気によじ登っていきました。

が、ちょうど、その時です。

まっ黒な雨雲の中から、ピカリッ！と、いなづまがきらめくと、ザアと、大つぶの雨が、たたきつけるように降って来て、すぐ、耳をつんざくような、はげしいかみなりがとどろきました。

で、かみなりぎらいのツキノワは、思わず目をつぶって…………

「くわ原、くわ原——」

と、耳をおさえながら、そうつぶやいた言葉も、その半分は泣声です。そして、その泣きづらの上で、また気がいのように、ピカピカッと光り、ゴロゴロ鳴って、かみなりは、滝のような雨と一しょに、まっ黒な雲に乗って、だんだんこちらへ近づいて来ました。

たまらなくなったツキノワが、大くりの木から降りようと、かた足はずした時でありました。目もくらむような、するどい光のいなづまに打たれて、

「助けて——！」

と、さけぶと同時に、

地面をたゞきつけて、耳のこまくも破れてしまったかと思うような、物すごいかみなりが鳴って、気の遠くなったツキノワは、大くりの木からすべり落ちると、もう何もかも分からなくなってしまいました。

それから、いく時間かが過ぎて…………

朝になっても降りやまぬ大雨と大あらしの、はげしいひびきにツキノワは、ようやく正気を取りもどしました。そして、キョロキョロあたりを見回して…………

「聞き入れ無い者は、けり飛ばして、赤い花の悪まに食わしてしまうぞ！」

と、どなって、こわい顔してけり落とすぞと言ったように見がまえました。

これには、弟うさぎ達も、仕方なさそうに、しぶしぶ一羽、二羽と、みんな火の粉の下を、まるびつころげつして、山の中ほどから、下へ下へ逃げて行きました。

が、まだ、うさぎの習性で、上へ上へ——山へ逃げようとする弟うさぎもいるので、ヤトは、頭の上から火の粉をあびながらも、長い間、となり山にがん張って見張っていました。

## 6. 山つなみ

ツキノワは、きじが、まむしをたい治してくれたことを知らずにいました。

で、あなの出口に、まむしが見張っていると思って、しばらくはささぐまの土あなから、帰れそうもないとあきらめたものか、ささぐまの子ども達と昼ねをして帰ろうと、のん気な考えを起こしました。

そして、ささぐまの子ども達のそばへ横になると、すぐねついて、深い土あなのおくでは、時間も分からず、あらしも地面の上を通過してしまうので、何んにも知らず長い間、グウグウぐっすり、いゝ気持でねむっていました。

すると、そのツキノワのね顔へ、どうしたはずみか、火事場から火の粉が飛んで来たので……

「熱っ、熱つつつ——」

と、びっくりして目を覚まし、飛び起きてあなの外をのぞいて見ると、もうもう立ちのぼる黒煙と一しょに、まっ赤な火の粉が、一ぱい飛んで来るので、

「あっ赤い花の悪まだ！」

と、思い出したようにあわてて、あなの中からはい出ると、ピューピューはげしいあらしで、谷向このひのき山が、明々ともえ上がっていました。そして空には、いつの間にか夕暮れの雲が流れて、そのうえ、まっ黒な雨雲が、頭の上からおおいかかるように低く飛んでいるので、一っそう火の手が、大きく明るく映って見えました。

「大きな、赤い花の悪まだな——」

と、ハラハラしながら、横吹きのアらしの中を夢中になって、大くりの木の下まで、フーフー息をつぎながら走って行くと、野うさぎの両親やりすの家族も、みんなすの中から飛び出して、わいわいさわいでいました。

そして、野うさぎの両親は、子うさぎ達のすがたが見えないので、ことに母うさぎは、早や泣き顔になって……

「——たしかに、子うさぎ達は、朝早くから、ひのき山のふもとへ、みんなで草かりに出かけたんです——まだ帰らないところをみると、赤い花の悪まに食われてしまったにちがいありません——」

と、悲しそうになみだを流しています。

で、父うさぎは、これを打ち消すように、……

「でも、そう、くよくよ思っても仕方がないよ——あらしの中の、こんな大きな赤い花の悪までは、見に行ってもやることも、救いに行ってもやることも出来ないじゃないか、それに、みんなは、なんとかうまく、無事に逃げていると思うんだが——」

……母うさぎを元気づけるためにそう言いましたが、本当は、父うさぎも心の中では、心配で心配でなりません。

それから、しばらくたって……

ヤトは、ゆめうつゝのうちに、なんだか、ポカポカからだがあたたまる感じがしたので、目を細く開いて見ると……

そこは、くまの岩屋で、こぐまのツキノワといっしょに、母ぐまにだかれてねていました。

そして日なたぼっこ、せいけつずきなくまの岩屋は、南向きの岩と岩とのすき間から、キラキラ強い日ざしがさしこんで、ねどこのしき草も、よくかんそうしてあたたかでありました。

ヤトは、はじめ、母ぐまにだかれていたので、ちょっとおどろきましたが、ツキノワがそばから……

「ヤトさん、どうしたのだ——もう少しでおぼれるところだったよ——しばらく、ぼくたちの岩屋で休んでいくがいいよ」と、いつてくれたので、ヤトは安心して……

「ありがとう——」

そういつて、ツキノワのほうに頭をさげると、

「いや、ぼくが、助けたのじゃない——おかあさんが、流れでおぼれていた君を岸へひきよせて、口にくわえて岩屋まで運んでくださったんだよ」

と、ツキノワは、母ぐまの顔を見て、ニッコリとわらいました。で、ヤトも母ぐまのほうへふり返って……

「ありがとうございました」

と、ていねいに礼をいいました。

すると、母ぐまは、

「私が、来合わせてよかったですね——で、また、どうして丸木橋なんぞ、わたろうとしなさったんですか——」

と聞いて、ヤトが丸木橋をわたろうとしたことまで知っていたので、矢倉岳のいたずらざるの話をおもしろくしました。そして、こんどは、ツキノワのほうへ……

「——それで、金太郎さんに助けてもらおうと思うんだが、ぼく、どうしても丸木橋をわたることができないから、ぼくにかわってツキノワさん、このことを、金太郎さんにたのんでくれませんか——」

といいつて、ピョコンと頭をさげました。

すると、母ぐまも、さんせいするように……

「このとうげの、くりの実を、よこ取りするような山ざるたちは、お前も手つだって、こらしめてやりなさい」

と、ツキノワへ、きつくいつて聞かせました。

そこで、ツキノワがかわって、金太郎の家へいくことになりましたが、そうなる——ツキノワの足には、立木にもおぼれる強いつめを持っているので、長い丸木橋でも、平気でわたっていくことができました。

が、ツキノワも、まだ一度も、金太郎の家へいったことがありません。

で、ヤトと同じように、よくかぎわけることのできるはなで、金太郎やジロツポのからだのにおいをかぎつけながら、どちらの足あとでもよいから、足あとはないかと、金太郎とジロツポが、いつもやって来る尾根の上へのぼっていきました。

くまは、いつもなら尾根の上を通るようなことはしません。かならず尾根のどちらがわか谷間をいくのがしゅうかんです。だが、きょうは、そんなことはいつておられなかったのでしょうか。

そして、やがて、尾根の上へのぼり切ると、そこからは川向こうの遠くのほうまで、よく見わたすことができて……

谷川は、くまの岩屋を少しくだったあたりから、北のほうへ大きく折れて、川はぼが広くなると、まがりくねりしてゆるりと流れていました。そして、川の手前のこんもりとした森かげから、白いけむりが一すじ、高く立ちのぼっているのが見えました。

「あっ、金太郎さんの家だっ」と、ツキノワは思わず声を立てました。

金太郎は、ツキノワから、いたずらざるの話の聞くと、ジロツポもよんできて、山ざるをこらしめる方法を話し合いました。

そして金太郎は、  
「さるのむれが、やって来ない前に、早く、くりの実を取り入れておいて、おとりのかごを作って、さるをこらしめてやろうと思うが——」

と、そうだんを持ちかけると、二ひきももちろんさんせいしました。

で、金太郎は、竹やぶから七、八本も、太い青竹を切ってきて、細く長く竹をわると、これで大きなかごをあみしました。また、ツキノワとジロツポは、森の中にわけ入って——ツキノワが高い木の上へのぼって、ふじづるを前足のするどいつめでかき切ると、ジロツポが木の下で、つるの根をかみ切って引っ張り、ふじづるを、なん本もなん本も、エッサエッサ川岸まで運んできました。

よろこんだ金太郎は、そのふじづるで、細いなわと太いつなを、長く長くなって、そのなわとつなのはしを、がけに近い杉の木にむすびつけ、なわとつなどが、もつれないように丸木橋をわたって、ふかい谷川の上へ、二本のつり橋をかけました。

そして、また、細いなわのさきを、かごのつり手にむすんで、太いほうのつなは、つり手に通して、そのはしを大くりの木へしっかりとむすびつけました。

これで、仕事が終わったので、けものたちの家ぞくは、みんな出てきて……

足がら山のくりの木に  
いがぐりぼうずがなったので  
お山のけものはくりの実の  
はじけておちるを待ちました。

と、歌いながら、くりの木のまわりを、ぐるっと取りかこみました。

そこで、金太郎は、くりの木の太いみきを、両うでかかえ……

「よいさっ、よいさっ、よいさっ——」  
かけ声とともに、力いっぱいゆさぶると、みんなの頭の上から……  
パラパラと、くりの実があられのようにふってきました。

さあ、けものたちは、大よろこびです。

お山のけものはくりひろい  
さあさみんなでくりひろい  
足がら山のくりの実は  
みごとにうれてはげました。

(曲譜スカウティング誌五五号一頁)

みんなげん気に歌いながら、取り入れにかかりましたが、

それで、最前から、岩かげでつばさを休めていたきじも、羽根をあふられて思わず、大空をながめました。

すると、いつもとちがったいやな色の空を、大きな鳥がつばさを広げて飛んで行くように、真っ黒な流れ雲がいそがしく、北へ北へ飛んでいました。

で、きじは何か、おそろしいことが、今にも起こるような予感がして……

「こんな日には、早く、すへ帰るにかぎる……」  
と、岩かげから、パッと飛び立ったものの、大たかや、はやぶさのしゅうげきにそなえて谷川の流にそって低く飛んで行きました。

が、ビュービュー吹く山あいの、風にさからっては、速力が思うように出せません……で、思い切って大空へ、高く舞い上がって行くと、右の方に見える相模（さがみ）の海が、海神でも荒れくるっているようなひどいあらしで、山のような白波が高く波立って、ゴーゴー大空までも、海鳴りが聞こえて来るように感じられました。そして、すぐ目の下の山や谷を見ると、森も林も草むらも、はげしいあらしにあふられて、ちょうど緑の波が、大きく波打っているように見えました。

そして、その時、ひのき山から……

「あっ煙だ！赤い花の悪まだ！」  
ときじは、おそろしそうにさげびました。

それは、長い間の晴天で、かわき切ったひのきの枝と枝とが、風のためにはげしくすれ合って、自然に火を吹き出したためでしょう。

きじは、たびたび起る山火事のおそろしいことをよく知っていました。山の何物をも残さないで焼きつくしてしまう山火事は、山の動物達にとっても、一番おそろしい悪ます。そして、ふと、去年、ひな鳥をいだいたまま、すの中で焼け死んだ山鳥の母親のことを思い出して、急に、森のすに残した家族のことが、心配で心配で、はげしいあらしの中で、ぐんぐんつばさを速めました。

ちょうど、そのころ……

子うさぎ、いや今は、もうりっぱなおとなの野うさぎになっていたヤトが、弟うさぎ達を連れて、ひのき山のふもとで夏草をつんでいましたが、パチパチ自分達の方へ、もえ広がって来る山火事に気づいて、口々に……

「赤い花の悪まだ！」

「逃げろ、逃げろ！」

「となり山へ逃げろ！」

弟うさぎ達は、うさぎの習性で、すぐ、山へ山へ、となり山へ逃げようとしていました。

が、ヤトは、火の手は、いつも上へ上へと、もえ広がることを知っていたので、やがてとなり山へも火事移るだろうと、ピョンピョン弟うさぎ達よりも、先に山へかけ登って……

「山へ登っては危ない！道を横にとって、下へ下へ逃げるんだ……」

と、大声にそうさげびながら、弟うさぎ達の登って来るのを、みんな下へ降ろしてやろうと、けん命になってさえぎりました。

だが、火の手が、下の方から追っかけるようにもえ上がって来るので、弟うさぎ達は、何をじゃまするのだと言ったように……

「でも、赤い花の悪まが、下から追っかけて来る……」

と、ほのおをおそれて、どうしても、山から降りようとはしません。

で、可愛いそうだと思いましたが、ヤトは、

いまだに、青々と水をたたえているこの滝つぼの水面では、おおみずすましやげんごろう、そして、みずぐものような小さい虫に至るまで、毎日水上ゲームを楽しむことが出来ました。またその水ぎわには、あおさぎやこさぎなどのなか間が、ここばかりに集まった川魚をとらえて、その日その日を気楽に送っていました。

そして、その付近の森や林の中から、つつどり、ひよどり、おおるりなど、小鳥の中でも歌の名手の、美しい声で合唱する山のコーラスが、毎日すずしい風に乗って流れて来ました。

それから、また、この滝つぼを取り巻くようにして、いろいろなけものなか間が、あちらこちらでそれぞれ、楽しい自分達のすを作っていました。その中で大きいけものと言えば、ジロツポ達野じかの家族と、裏山の古すに暮らしているきつね夫婦と、くぬぎ林に横あなをほって住んでいるたぬきの一族だけでありました。

そこで、きつねとたぬきは、よく人間をばかすと言われていますが、この山では…………

「金太郎さんは、山でもきらわれ者の私達まで、みんな同じようにかわいがって下さるから——いくら、ばかそうと思っても、親切な人には、ばかしの術がかかりませんよ」

と、きつねが言いますと、たぬきも、また…………

「そうですとも、そうですとも、私らも、いつも人間から、白い目で見られるきらわれ者のなか間ですが、金太郎さんだけには、大変かわいがられています…………そのためでもありませんが、これでも、小鳥の卵をねらうへびや、畑を荒らす野ねずみを退治して、少しは世の中のために尽くしているつもりですが…………」

と、相づちを打ちました。

そうです。きつねとたぬきの言うとおりで…………人間からいたずらを仕かけないかぎり、きつねやたぬきの方から、悪たくみを仕かけてくるようなことはありません。

さて、話は、また変わって、そのころ、子じかのジロツポは、毎日のように滝つぼの横から、用水路のズイドウを通して、金太郎の家へ遊びに行きました。そしてジロツポは、いつも金太郎に…………

「僕、ヤトやツキノワの所へ遊びに行きたいなア…………」

と、ねだるのです。

だが、長い日照り続きで、畑の作物がかれそうになっているので、金太郎は、

「きょうも、畑へ、水あげをしなきゃならないから…………」

と、子じか相手の、山遊びどころではありません。用水路に水車を作って、ガッタンコットン。ガッタンコットン、朝早くから夜おそくまで、畑の水上げ仕事にはげんでいました。

でも、この山にも、長い日照り続きも知らぬ顔で、毎日毎日のん気に昼寝ばかりしている者がありました。それば、滝つぼのすみっこの、どろの中に住んでいるどろがめの家族達でありました。

きょうも天気がよいので、親がめは、がけの上にはい上がって、カンカン照る日に甲らをほしていました。

が、とつ然、バシャンと水の飛ばしりが、半出しのねぼけ顔へかかったので、そっと首をのぼし、じゃまくさそうにかた目を開いて見ると、サ、ハ、ハ、ハ、サッと、滝つぼの水面を走るように、さざ波が立って、パッと一勢に水鳥達が、バタバタ飛び立って行きました。

親がめは、また、ねむそうに首を甲らの中へ仕舞いながら…………

「さ、波ぐらいに、バタバタさわいで——水鳥達は、あわたゞしくてこまったことだ——」

そう、つぶやいているすぐその後から、今度は、サーっと、森や林を大きく鳴らして、小じゅりまじりのはげしいあらしが、パラパラどろがめの甲らをたたきつけました。

さて、くりの実を、りすや野うさぎのすへたくわえると、いたずらざるがやってきて、高い木の上のすでも、石だたみの間のすでも、たちまち、たたきつぶされてしまいます。

で、りすの母親と、野うさぎの母親は、また心配になってきて…………

「山ざるは、私たちの所へは、すぐ、のぼってきますから、心配なことです」

「私たちの石あななども、わけなく、たたきくずされてしまいますので——」

二ひきが、どうしたらよいだろうかといった顔つきで話し合っていると、これを聞きつけたツキノワが…………

「では、ぼくたちの岩屋へ、くりの実をあずけなさい——山ざるどもが、おしよせてきても、とうさんぐまの一たたきで、どんな大ざるでも、たたきたおしてくれますよ」

と、こともなげにいいました。

すると、そばから父ぐまも、

「ハ、ハ、ハ、それがいい、それがいい、——みなさん、くりの実は、私が身にかえても、かならずまもってあげますよ」

そう、カラカラわらって、力強くいつてくれたので、みんなは、くりの実を、くまの岩屋へあずけることになりました。

そうして、けものたちが、くりの実を岩屋へ運んでいる間に…………

金太郎は、いがのついたままのくりの実を、百こばかり集めてかごに入れ、さるの手首がはいるだけの、あみ目にあんだかごのふたを、ふじづるでしっかりとむすびつけました。そして…………

「さあ、できあがった…………」

と、向こう岸のジロツポへ、高く手をふって合図すると…………

ジロツポは、杉の木にむすんでおいた細いなわのほうをくわえて、テクテク歩き出しました。

で、おとりのかごは…………

太いつなをつたわって、谷川のがけとがけとの中間へ、するする引っぱられて、ふかい急流の、ま上にぶらさがりました。

これで、おとりのかごの用意が全ぶできあがったので——けものたちも、金太郎も、自分のすや家に帰って、その日の夕ごはんは、一年ぶりでくりの実のごち走に、みんな舌づつみをうっていました。

が、ちょうどそのころから、急に、強い風が吹き出して、夜になると、とうげも谷も、ゴ—ゴ—山鳴りがして、足がら山は、森も林も、大あらしになってしまいました。

だが、そのよく朝は、すがすがしい秋晴れで、山ざりがはれてしまうと、朝日にてらされた富士の山が、美しいすがたをくっきり現わしました。

そして、森や林から…………

「カッコー、カッコー」

早起き鳥のかっこうが、とうげのみんなを起こしてくれました。

ヤトも、かっこうのげん気な声に目をさまし、つみ石のすき間から、ピョンピョンはねて出て、朝のくう気をむねいっばいすうと、ていねいにおじぎをして、

「お日様、お早ようございます——お山もお早ようございます——」

と、たい陽と富士の山へ、朝のあいさつをしてから、思わず、大くりの木を見あげて、

「あ、大きなさるがいるっ」

と、高い枝の上に、大きなさるを、一びき見つけました。

この大ざるは、物見のさるです。

毎年、秋のこのごろ、あらしのよく朝にはかならず、むれを組んでおそって来る矢倉岳の物見の親ざるです。

さるは、昨夜の大あらしにもかかわらず、くりの実が、一つもおちていないので……

「おかしなことも、あるものだ——」

と、ふしぎそうに、キョロキョロあたりを見まわしていましたが、しばらくして、風に乗ってきたくりのにおいをかぎつけ、おとりのかごを見つけました。

「あっ、向こうの、かごのなかにあるぞ——」

と、くりの木からとびおると、身がるにつり橋をつたって、かごの上にとび乗りました。

そして、親ざるが、

「キッキー！キッキー！」

一声、二声、さげび声を高くあげたかと思うと、森の向こうから……

大ざる小ざるが現われて、みんなつり橋をつたってかごにとび乗り、ふたのあみ目から手をさしこんで、くりの実を引っぱり出そうとあせりました。

が、くりの実をつかんだ手首が、あみ目からぬけません。

くりの実をはなせばぬける手首を、よくふかざるは、くりの実をはなさないで、かえって強くにぎりしめたので、いがが、手のひらへつきささって、いたくていたくてたまりません。

さるたちは、もう半気がいいです。

で、かごを強くゆさぶって、大あばれにあばれると、それにつれて、つり橋も大きくゆれ出しました。

そのうえ、後から後へと、大ざる小ざるがやって来て、くりの実をとりあい、長いつり橋の上で、見ぐるしいなかまあらしを、そうぞうしくはじめました。

大ざるは、小ざるをかきのけ、また、小ざるも、大ざるに負けまいと、かきあい、かみあって——大ざるは、小ざるをしかりつけて……

「小ざるは、あぶないから、後からだ後からだ——」

と、大声でどなると、小ざるは、

「大ざるは、ずるいぞ——小ざるにも、けん利があるんだ——」

小ざるも、なかなか負けてはいません。

すると、また、大ざるが、

「小ざるのくせに、なま意気なっ」

と、大ざるばかりで、くりの実を全ぶ取ろうとするので、

「大ざるは、おうぼうだぞっ」

そう、おたがいに、口あらしをしてから……

「この、小ざるめ！」

と、大ざるに、強くけりとばされた小ざるが一びき、つり橋を、つかみはずして……

「助けてくれ！——」

と、さげびながら、谷川へおちていきました。

そうしたあらしが、しばらく続くと、山ざるの重みと大さわぎに、太いつなのつぎ目も、だんだんゆるんで、ついに、まんなかから、ぷつりと二つに切れて……

「うわっ！！——」

それで、まむしは、ぎらつく目で、下からきじをにらみつけて……

「首を、おさえつけられても、金しばりの術があるぞ——」

と、長いからだを細いしっぽの方から、ぎやくにからみついて、きじを羽根ごと、ぐるぐる巻きに巻きあげました。

だが、きじは、じいっと自分のからだへ、まむしの思うままに巻きつかせておいて……

「もう、それでいいのか——」

そう念をおしたかと思うと、急にパッ！と一羽ばたき、緑に光るつばさを、力一ぱい大きく広げました。

すると、もうそこには、まむしのかげもすがたも見当たりません。まむしの長いからだは、ずたずたに切りさかれて、ちりちりばらばらに飛び散ってしまいました。

と、思うと、また、きじも油だんがなりません——最前から、向こう岸の松の木の上に、きじの、二倍ほども大きい大たかがねずみ色のつばさをたたんで、じいっと静かに、今に飛ぶか今に飛ぶかと、きじの飛び立つのをねらっていました。

で、それを感じたきじは、

「おやっ大たかが、ねらっているぞ——」

と、すぐ、首を地面にすりつけるようにして、自分の羽根色を同じ緑の草むらにかくれながら、しばらくは、羽ばたきの音も立てないようにつめ先で走って、今度は、大たかの大きいつばさでは、どうてい飛ぶことの出来ないくぬぎ林の、木と木の間をぬうように低く飛んで逃げ出しました。

けれど、大たかも、するどい目と勘を持っているので、すぐ、きじの逃げ道を……

「くぬぎ林の南へ逃げたなっ——」

そう、感じると、その手で逃げるならこの手で行くぞと、くぬぎ林の上をまっすぐに飛んで、きじの逃げ口へ先回りしました。

そして、林の下をぬけて来たきじの出っ鼻へ、パッ！と、上から飛びかかって行ったので逃げ場を失ったきじは、

「しまった——」

ちょっと、だじろぎましたが、機びんにつばさをかわすと、すぐ一直線に大空へ、高くまい上がっていきました。

すると、ちょうどその時、

かりにかけては鳥一番のはやぶさが、はい色に赤味がかったつばさをはやめて、空の横合いから、はやてのように飛んで来て、きじと大たかの間へ、サッとわりこんで、大たかのつばさを、きしゅうの一げきで、

「えい！」

と、はげしくけたので、大たかは、

「ふい打ちは、ひきょうだぞ！」

そうさげぶと同時に、バサッバサッと、白い下ばらまで見せて、もんどり打ってよろめきました。

で、きじは、このはやぶさと大たかの一つき打ちの、そのすきに救われて、つばさをすぼめてななめ下へ一直線に、すーうっと、林の中へ降りてしまうと、羽尾音をしのばせていつの間にか、かけるようにして、滝つぼの岩かげまで逃げてしまいました。

五十日余り晴天が続いても、滝つぼの周囲だけは樂園で、峠に住む動物達にとっては、ここは命をつなぐ、たゞ一つの泉（オアシス）でありました。

と、念をおしてから、石がきを……

「うん、うん——」 かけ声に合わせて、力一ぱいおしてみました。が、どうしたことか、向こうへは、少しも動こうとしません。

それで、今度は、右前足をあなの中に回して、左前足で石かどをかかえ、後の両足で石がきを、ぐっとふんばって……

「うーん！」

と、力を入れてこちらへ引くと、かけ石が、ゴクゴクと動き出したと思ったら、ふいに、こちらへ、すーっとぬけました。

が、そのひょうしに……

「うあ——」

ツキノワは、大きな石をかかえたまま、ころころうしろへでんぐり返ってくまざさの上をすべって、ずうっと下の土あなへ、ころげ落ちてしまいました。

そして、ツキノワが……

「おやっ、ささぐまのすだ——」

と、気づいて、よく見回すと、そこは、ささぐまが足のつめで、地面を横ななめに深くほって、自分達で作上げた土あなです。が、もぐらの土あなのように、年がら年中、日の目を見ないような不衛生なすではありませんでした。そして、そのうえ、青々としたささの葉までしきつめて、住み心地のよさをなすでありました。

で、ツキノワは、すのおくの方へ……

「今日は、だれかいませんか——」

と呼んでみましたが、

「——」

なんの返事もないのは、ささぐまの夫婦も日照り続きで、かわうそのように川を下って、どっかへ仕事に行っているのでしょう……

でも、この春生まれたと聞いているささぐまの子はいないかと、横あなのおくまでは行って行くと、三びきの子どもがのん気そうに、すやすや昼ねをしていました。

それで、目を覚まさせてはならないと思って、そのまま、そっと帰ろうと、あなの出口の上の、ささのくきに、ツキノワが前足をかけると……

ささの葉の下から三角頭のまむしが、黒味がゝかた茶色のうろこに、ぜにがたのはんてんのある長いからだを、うねうね無気味にうねらせて……

「上って来て見ろ——」

と、毒をふくんだきばを、ぐっとむき出して、今にも飛びつこうと待ちかまえていました。

「こりゃ、こまった——大きなまむしがいる——」

すると、その時、遠くの方から一羽のきじが、美しいつばさを、すうーっとすぼめて、ななめ横にまい下って来て、ささむらの向こうへ降りたかと思うと、いつの間にか、ささの葉の下をくぐり抜けて、まむしのうしろへそっと近づいて、ふいにまむしの首すじを、

「この、毒虫め」

とばかり、するどいつめ先で、ぐっと、ねじりつけるようにしてふみつめました。

まむしも、首すじをおさえつけられては、かま首をふり回すことが出来ないのです。自まんの毒ばが、なんの役にも立ちません。

「つり橋が切れた！——」

大ざる小ざるは、切れたつなの両はしにしがみついたまま、じゅずつなぎになって、ドー！！と、ひゞきを立ててなだれのように、みんな谷川へおちていきました。

山のさだめをまもらないで、よそのとうげのくりの実を、よこ取りしようとした矢倉岳の山ざるは、自分たちのよくで、自分たちがこらしめられました。

しかし、山ざるは、およぐことができるから、急流におちても、おぼれることはありません。

でも、来年からは、これにこりて、このとうげのくりの実を、よこ取りに来るようなことはありません。

ジロツポのまき

3. 足あとを消しながら

くりの実の取り入れがすむと、まもなく、つた、かえで、いちよう、ぶな、かば、なら、かきの木の葉まで、一枚一枚色づいて、足がら山は、あの尾根もこの谷も、赤、黄、茶色の美しいもみじでかざられました。

すると、ちょうど、そのころから、富士の山が、いただきの方から、まっ白な雪の衣に着がえ始めました。

そして、大空にキラキラきらめいているお星様も、今までは、地上にいっぱいゆを落とていましたが、今度は、山のはだ一面に、まっ白いしもを落し始めます。それで、おそ咲きの、りんどう、とりかぶと、ひめじそと言った花までが、みんなしおれてしまうと、ポツポツこがらしが吹き出して、今まで色とりどりに美しかった山々のもみじ葉も、だんだん吹き散らされて、ただ枝の先に残されたかきの実だけが、目にしみ入るように、まっ赤な色を見せていました。そして、かれて散った落葉のなかには、谷川の流りに乗せられて、さびしく流されて行くものもありました。

また、秋の間、やかましく鳴き続けていたまつむし、くさひばり、かねたきなどの、虫の鳴き場もなくなるほど、秋草の草むらもかれはて、すっかりはだかにされてしまいました。

そのころになると、小鳥も落ち葉を木の上へ運んで行くように、山の動物たちはみんな、寒い冬を過ごすための準備や、すを作るのにいそがしくなります。また、冬ごもりのための食物をためようと、えさあさりにかかりきっている動物もいました。

やがて、とうげにも、身を切るような冷たい風が吹き出すと、ちらちら雪がちらついて、寒い寒い冬がやって来ました。そして、ふり積む雪が、あの谷もこの谷もうずめつくして、森も林も、銀色にかがやく雪の花を、キラキラまぶしく咲かせました。

もう、すぐ、三才じかになろうとしていたジロツポは、雪景色をながめると、こきょうの甲斐（山梨県）の国が、なつかしく思い出されてなりません。

ジロツポの生れた所は、甲斐の国の、籠坂峠のふもとで、山中の湖の南がわにあるみつ林の、そのなかにある大ぼらのほらあなで、そこは、地水が暖かいので、冬でも地ごけや岩ごけが、青々と生えていて、野じかの食料には困らないよい場所でありました。

また、山中の湖は冬になると、いつも、湖のおもてを冷たい風がなげるように走って、さざなみの音を立てていましたが、富士の山が朝日にてらされて、まっ赤なすがたを、さかさまに写してました。

しかし、ジロツポは、なつかしい生れこきょうのほらあなや景色より——ふぶきの夜に籠坂峠をこえて、さまよいにげたそれからの、おそろしかったいろいろの旅の出来事を思い出していたのです。

それは……

大ぼらのあるみつ林のおくには、ジロツポの家ぞくのほかに、野じかのなか間が、あちらこちらでむれを組んで、楽しく暮らしていましたが、ちょうど、きょねんの冬のことでありました——みつ林が、銀色の雪でおおわれたある夜から、毎夜のように、このみつ林のおくへ、三国峠の山犬が七、八っぴき、連をさそっておそって来ました。

野じかにとっては、山犬は、おそろしい強てきです。年とった大じかさえ、なかまの少ない時には、山犬の足あとを見つけただけでも、遠くへにげ去ってしまうほどで、野じかのすでは、心配な夜が、毎ばん続いていました。

そして、今夜も、また……

「ウ、ハ、ハ！！クオン！クオン！」

はげしいふぶきのひびきにまじって、山犬の遠ぼえが聞こえて来ました。

野じかのすでは、家ぞくを守る父じかが、夜の目もねむらず、けいかいの耳をそば立てていました——大きな耳の野じかは、森の向こうで、木の葉の動く音でさえ、よく聞き分けることができます。

「ウ、ハ、ハ！！クオン！クオン！」

と、山犬の遠ぼえが、だんだんこちらへ近づいて来ると……

「また、来たな——」

見はりの父じかは、ねている家ぞくを、そっと起こして、

「じーっと、しているんだよ——」

と、ひくい声で注意すると、子じか達は、ふるえ上がって、

「僕ら、こわいよ——」

こ年生れたばかりの子じか達は、ガサガサ母じかの、からだの下へもぐりこもうとさわぐので、父じかは、ハラハラしてたまりかね、

「もう少し、静かにしているんだ——」

と、しかりつけました。

でも、二才じかともなると、おそろおそろ大耳を立てて、遠ぼえを聞こうとする子じかもいました。

が、山犬の遠ぼえは、とうげのなかほどで、急に、ハタとやんで、ただ、ふぶきのひびきだけが、はげしく荒れくるっていました。

しかし、それは、山犬が、しゅうげきをやめたのではありません——野じかのすへ近づくと、いつものせん法の、しのびよりで、ねらった野じかのすへ、足音をしのばせて、静かに近づいていたのです。

で、しばらくすると、から松林の向こうから……

「山犬だ！山犬だ！」

「みんな、来てくれ——！」

と、救いを求めるけたたましいさけびが、ふぶきをついて聞こえて来ました。

さあ、なか間のさだめです。なか間が危けんになった場合、みんなで助け合って、強てきに当らねばなりません。

こらしめのために、後から追っかけて行くと、山いたちは、あわてふためいて、すぐ川ばたの、がけの石あなへ、自分の身長の十倍以上もはなれたこちらから、サッサッサッと、三段飛びで飛びこんでしまいました。

そして、すぐ、あなの中から、こちらをのぞいて……

「あま酒進上——」

と、ツキノワをばかにしたように、からかいました。

が、子ぐまでも、ツキノワのからだは、小さい石あなへ飛びこむことが出来ません。

それで、前足を石あなへさしこんで、とらえてやろうと思いましたが、かえって山いたちに足をかまれる危けんがあると思って、あなの前から……

「うう——」

と、一声うなると、山いたちは後ずさりしたので、そーっと近づいて、あなの中をのぞいて見て……

「おやっ、へびのすだ。うようよしまへびがいるよ——」

と、山いたちにも、知らせるようにつぶやきました。

で、初めて気づいたように山いたちが、おくの方へふり向くと……

このあなに住んでいるしまへびの一族が、七、八びきも集まって、長いからだでとぐろを巻いたまま、山いたちを、ただ、ひとのみにのんでやろうと、ぎらぎら目を光らせて、こちらをにらみつけていました。

それで、山いたちは、もうツキノワをからかってはいられません。そして、へびなんぞにのまれてたまるものかと、自分の方から先に、しまへび達のとぐろをかき散らしてやろうと思って、首を低くして白いきばをむき出し、しりを高く上げてしっぽをふくらし、ポンポン左右へはねて、へびに飛びつかれないように用心しながら、するどい足のつめをとがらせて、とく意のこうげき法で、じりじりせまって行きました。

だが、しまへび達は、落ちついて、するするっととぐろをとくと、みんな一しょに、ぬうーとかま首をもたげ、まっ赤な口を、さけんばかりに大きく開いて……

「だれだ！屋ねのじゃまするのは、頭から、そっくりのんでしまうぞ——」

そう言って、ペロペロしたなめずりするおそろしさに、山いたちは、こりゃ、自分のはや、つめではかなわぬと思って、急に逃げごしになってしまいましたが、せまいあなの中では、はずみをつける広さもないし、そのうえ、外にはツキノワが、がん張っているの、飛び出すことが出来ません。

そのうち、しまへびの家族達が、うす青く茶色に光ったうろこの、長いからだをニョロニョロうねらせて、だんだん近づき、気持の悪いしっぽが、ちょうど目でもあるように、あちらからもこちらからも巻きつこうと、山いたちをねらっています。

で、本気に逃げごしになってしまった山いたちは、そうなると、たゞもう、おそろしくおそろしくて、カチカチはを鳴らしながら、あなの外のジロツポへ……

「助けて下さい——もう、けっして、やまねを追い回すようなことはしませんから、どうぞ助けて下さい——」

と、そう言って、手を合わさんばかりにして頼みました。

こうなると、ツキノワは——いたずら者の山いたちでも、同じけものなか間です。間ちがいの起こらないうちに、早く助けてやろうと思って……

「じゃア、二度と、岩屋のお客に失礼するようなことはしないな——」



こまりぬいたツキノワは、腹の方なら、前足でもかけますが、せ中の方は、後足をきょうに後へ回してかいたぐらいでは、とつてもかゆみがとまりません。

で、太い松の木の前に、後足だけで人間のように立って、ひぢを曲げたりのぼしたり、ガサガサした松のみきにせ中をこすりつけて……

「おちに、……—」

しばらく体操を続けていましたが、それでも、ますますかゆくになるので、母ぐまに大ありをなめてもらおうと思つてころげるように急いで岩屋へ帰ると……

くまの岩屋では、大さわぎが始まっています。

と、言うのは、去年の暮れから、とうみんのすきなやまねの兄弟が、寒い冬をこすために岩屋のすみで冬ごもりをさせてもらっていましたが、やまねの兄弟をねらつて飛びこんで来た山いたちのために、最前から追っかけ回されて、兄弟は、せ中に黒い太いたてじまのある小さいからだをひるがえして、岩屋の中の、岩かどから岩かどを、青くなって逃げ回っていたのです。

そうすると、お客のやまねを助けるにも、父ぐまや母ぐまの重いからだでは、これも、岩かどづたいに追っかける山いたちを、取りおさえることが出来ません。

で、父ぐまは、プンプンおこりながら下の方から、大きな声を張り上げて、

「こりゃ！この岩屋のお客を、どうしようと言うのだ——」

と、どなりつけました。

すると、その声が、岩屋中で鳴り返って、グワングワンやかましくひびきます。

母ぐまも、ハラハラして、

「私達の岩屋で、そんならぼうしてはなりません——」

母ぐまらしく、やさしく言つたつもりでも、声に力がこもっていたので、また、岩屋中いっぱいに広がってグワングワン大きくひびきます。

ちょうど、その時、ツキノワが帰ってきました。そして、このあり様を見ると

「山いたち！止めないか——止めないと、僕があい手になるぞ——」

そう言つたと思つたら、そこは、子ぐまの身軽さで、一番高い岩かどの上へよじ登って行きました。そして、その下を追い回る山いたちの上から、体当たりする覚悟を決めました。

それは、どうしても、やまねの兄弟を助けてやらねば、くまの岩屋の名よにかかわると思つたからです。

で、山いたちが、ツキノワのま下を通ろうとした時、

「今だっ——」

とばかり、ドスンとからだぐるみ飛び下りて、前足で山いたちの、金茶色をした長いしっぽをぐつと取りおさえました。

が、山いたちは、す早くしっぽを細めると、ツキノワの前足からするりっとぬけて、かなわないと思つたのか、

「ここまで、おいで——」

そう言い残すと、サッと、岩屋の外へ飛び出して、短い足でも回転が早いので、すごい速力で逃げ行きました。

「しまった——」

と、思つたツキノワは、

「待て！逃がさないぞ——」

で、見る見るうちに、野じかのなか間は、横なぐりに吹きつけるふぶきのなかを、から松林の野じかのすへ集まつて行きました。

そして、首を内に、後足で円じんを作り、そのなかに子じかを守つて、強いひづめでたてがきをかまえ、しっかりと、助け合いの輪を組みました。

「用意はいいぞ、さあ、どこからなりと、やつて来い——」

「これだけ、ひづめをそろえたからには、山犬なんぞに、負けてたまるものか——」

と、野じかのなか間も、元気よく氣勢をあげました。

そうです。このひづめのたてがきにかかつては、どんなに大きな山犬でも、すぐ、けり飛ばされてしまうので、うっかりかかつては行けません。

それで、はい色の、一番年老いた山犬が、

「お前達半分は、うら手の方へ回れ——」

そう、さし図すると、山犬達は、二手に分かれて……

「よし、僕達は、うらのがけから、野じかの頭ごしに飛びこんでやる——」

と、その一手は、から松林のうしろにあるがけの上へ、ふぶきに向つてよろめきながら、ぐるっと大回りして行きました。

そして、ふぶきのくるうがけの上から……

「ウォー！ウォー！」

おどしうなり声を、ほえ立てたかと思うと、パッと、金ちゃ色の、たくましい山犬が、先頭を切つて、野じかの頭ごしに円じんのなかへ、サッと飛びこんで行きました。

続いて、二ひき、三ひき……

山犬は、だんがんなような勢で、はげしいとつげきを開始しました。

それで、助け合いの輪を組んでいた野じか達も、山犬が、頭ごしに輪のなかへとびこんで来ると、強いひづめのたてがきも、もう、なんの役にも立ちません。たちまち方向転かんです。

すると、そのすきをねらつて、林の正面からも、うら手のこうげきをたすけるように、五、六っぴきの、若い元気な山犬が、年老いた山犬に連れられて、とぎすました白いきばをそろえ、するどくしゅうげきして来たので、野じかの円じんは……

「わあ——！」

と言つた一さわぎして、あつけなく、そうくずれになってしまいました。

で、子じか達は……

「おかあさん！こわいよ——」

「おとうさん！助けて——」

と、泣きさけんで、にげ回りました。

そして、その時でした。

あっ、あぶない！

ぶち毛の若い山犬が、きばをむき出し、一ひきの子じかめがけて、まっすぐに飛びかかつて来ました。

が、子じかが、サッと、からだをかわすと、若い山犬は、もんどり打つて、ドサッとたおれてしまいました。

「アハハハハ！おかあさん——山犬が、でんぐり返つたよ——」

と、元気にわらったこの子じかは、後にジロップと呼ばれるようになった二才じかで、むれ一番の元気者です。

だが、母じかは、ハラハラして…………

「また、来るから、子じかは、早くにげるんです——」

と、しかつても…………

「うゝん、僕、ちつともこわくないよ——」

と、二才じかは、にげ出そうともしませんから…………

「この子、なに、言うんです——早くにげるんですよ——」

そう言いながら母じかが、やっ気になって、二才じかをにがそうとしている間に、す早くとび起きた山犬は、また、らんらんとかがやく目で、ぐっと二才じかをにらみつけて、こうげきのし勢を取りもどし…………

「よくも、赤はじかゝせたな——今度こそ、許さんぞ！」

耳もさけんばかりに、大きく口を開いて、白いきばをとがらせ、ふたたび飛びかかろうとかまえました。

が、母じかの、

「おとうさん、二才じかが——」

助けを求めるそのさげびが終わるか終わらないうちに、タゝゝゝと、父じかがかけよってこの山犬めとばかり、大きな枝づので山犬の、横っ腹の下からすくい上げ、

「この子を、取られてたまるかっ」

と、全身の力をこめて…………

「えい！」

かけ声といっしょに、とげのいっばいとがったいばらのぼさへ、たたきつけるように投げ飛ばすと、若い山犬は、

「キャン！キャン！」

鳴きながら、いたそうにしっぽをまいてにげて行きました。

おすじかのつのは、他の動物と争うためのものではありませんが、子じかの命には代えられなかったからでしょう。

しかし、また、その夜も、山犬達のために、から松林の子じかが、かわいそうに二ひきも、うばい去られました。

そうした山犬のしゅうげきが、夜ごとにはげしくなるにつれ、このあたりの野じかのむれは、みつ林のすをすてて、だんだん旅へ出て行く者が多くなって来ました。

で、ジロップの家ぞくも、それから三日目のばん、山も谷も湖も、どこもかも、吹きつける雪けむりで見通しのきかないやみにすがたをかくして、ふり積む雪に足あとを消しながら、父じかが先頭に立って、道を南にとってにげ出しました。

だが、山犬のおそろしいついでせきは、にげ出して行く野じかをつけて、どこまでもどこまでも追っかけて来ることを、年とった父じかは、よく知っていたのです。

山犬は、野じかの足あとが、雪のために消されても、よくかぎ分けることの出来る鼻で、野じかのおいをかぎつけながら、追っかけて来ることでしょう。

また、太ったからだでも、谷間の岩から岩を飛び回るかじかさえ、す早く取りおさえることが出来ました。そして、また、日本の谷川だけに住んでいると言われるさんしょうおのはんざきと組打ちして、これをとらえたこともありました。

でも、雨が降らなくなってからは、こと谷川の上流には、いつの間にか、やまめもいわなも、どこへ行ってしまったのか、すがたを見せなくなってしまいました。そして、岩の間のさわがにも、水気のない岩あなのおくで…………

「ブツブツ——」

毎日、不平のあわを吹き立てて、日当たりの強いあなの外へは、いっこうに出て来そうもありません。また、谷川第一の働き手と言われているかわうそも、川水が少なくなってからは、川仕事が出来ないので、川下の滝つぼまで下って、かせぎ場を変えてしまいました。

…………で、ツキノワも川仕事をやめて、峠の北がわの谷へ山仕事に出かけました。そして、山たにしを拾い集めようと、深い落葉をかきのけると、いくら日照りが続いていても、この北向きの谷は、しめり気が多いので、おもしろいほど、ころころと山たにしが出て来ました。

で、ツキノワは、喜んで…………

「あったあった——これだけあればきょう一日は、おなか一ぱいごち走になれる——」

と、む中になって落葉をかきのけては、ころころ山たにしをころがして、さて、仕事ですんで…………

「さあ、ごち走になるか——」

小声でつぶやきながらツキノワが、うしろをふり返って見ると、せっ角あせを流してころがせた山たにしを、いつの間に来たのか、のりすが一羽、ツキノワには無だんでかたっばしから山たにしを失けいしている…………

「この、ふとゞきのりすめ！」

と、飛びかかって行くと、のりすは、さっと飛びのいて…………

「すみません、すみません、ごち走になってしまいましたよ——」

そうわびて、気まり悪そうに赤みがかった茶色のつばさを、バタバタさせて飛んで行きました。

すると、ツキノワは、急になんだか空腹を覚えて、のりすに食われた山たにしのことが残念で残念でなりません。それで、元気がなくなり、もう帰えろと、谷間のしだの葉をおし分けて、がけをよじ登ろうとすると、がけくずれの、日当たりのいい地面の上に、大ありの通っている道すじを見つけました。

「しめ、しめ、これで助かった——」

山たにしよりも大好きな大ありを発見したツキノワは、たらたらよだれを流しながら、ここが、ありの道の終点だとねらいをつけて、その地面の上を、ガサゴソ前足でほり返すと深い地面の下から大きなありが、四、五ひきあわてて飛び出しました。

そこで、その上を、ぐっと力を入れてふみつけると、今度は、大勢の大ありが足の下からぞろぞろはい出し、ツキノワの前足からみんなゴソゴソからだへよじ登って来ました。

くまは、大ありをなめることが大好きです。それは、ありが、くまの健康に欠かすことの出来ない塩の代りになるからです。

それで、ツキノワも、自分のからだの毛の中へ口先をつっこんで、ペロペロうまそうに大ありをなめました。

が、それでも、大ありが、毛のおく深くまでもぐりこんで、ガサガサ、ゴソゴソ歩き回るので、からだ中が、かゆくてたまりません。

夏が、すぐ、目の前へやって来ると、川原やつつみの石あなから、一番ねぼ助のへびやとかげが、やっと長い冬のゆめから目を覚ましてはい出し、湯気を立ててわき出している温泉の周囲へ、みんなぞろぞろはい寄って行きました。

また、くぬぎ林の中では、からからぬけ出したばかりの、かぶと虫やくわがたが、からだの三分の一もあろうと言う大きなつやほさみで、くぬぎの木の皮をむき取って、皮と身の間から、チュウチュウうまそうに、くぬぎのしるをすすっていました。

やがて、夏が来て…………

つつみの石あなからはい出した石がめが、川原の水たまりで泳ごうと思いました。が、今年は、どうしたことか、川原に水たまりが少しもありません。

それは、とのさまがえるが、

「ゲロゲロ、クェクェ——」

と、歌い出すつゆの初めごろから、まだ一てきの雨も降らなかったためです。

で、夏の初めがやって来ると、谷川の流れさえ、だんだんかたて、深い滝つぼの他には、岩間に少し水だまりが、ところどころ残っているだけでありました。そして、その残り少ない水たまりの中で、げんごろうやみずすましが心細そうに、川魚の子ども達を追っかけ回していました。

そして、また、谷川の流れも、日に日に細まって、とうとうかれ上ってしまいました。しかし、深いふちを作っている滝つぼだけは、いく日晴天が続いても、まんまんと青い水をたたえて、すずしい山風にさざ波を立てて、金太郎親子と、野じかの家族の命をつなぐにはじゅう分な水がさをたくわえていました。

こうして峠は、からつゆのままあちらこちらの松林で…………

「ギーギー、——」

はるせみが、やかましく鳴き出しました。

それで、金太郎は——ここでさえ、飲み水が、滝つぼだけになってしまったから、野うさぎのすや、くまの岩屋のあるもっと川上ではどうなっていることだろうかと、子うさぎのヤトや、子ぐまのツキノワのことが心配でなりません。

と言って毎日、畑の水やり仕事がいそがしいので、川上まで行ってやることさえできません。

話は、変って

子うさぎのヤトは、去年の秋、くりの実を取入れてから半年目で、もうりっぱな野うさぎに成長していました。

そして、この日照り続きで、こちらがわの、日かげの少ない岸では、若草がおおかた、かれてしまったので、弟うさぎ達を連れて、ひ上った谷間を渡って、みんなで向う岸のひのき山のふもとで、毎日のようによもぎつみや、若草がりの仕事にはげんでいました。

だが、ツキノワは、まだ子ぐまです。去年の冬には、せ中で雪すべりすることも出来るようにはなりましたが、小じかのジロップと同じように、半年や一年では、おとなぐまにはなれません。

しかし、ツキノワも、冬ごもりがすすんで春になって岩屋のあなをふさいでおいた雪のかべをこわして出て来ると、しばらくはやせていましたが、むさぼるように食物を食べるごとに、ぐんぐん急からだも大きくなって——谷川をさか上って来るやまめやいわなを、自分でつかみ取れるようになっていました。

それで、父じかは、家ぞくを連れて、ぎゃくに籠坂峠の尾根へ——風に乗った雪が、鼻のあなや目のなかへ吹きこむので、吹きおろすふぶきの方に半分せなかを向けるようにして、時々前足で鼻先やまつ毛の雪をかき落としながら、やっとのことで登って行きました。

そして、急に、南がわの山犬も通れぬようなけわしいがけの、雪ですべる岩かどを、横渡りにつたって、深い深い谷底へ飛びおりてしまいました。

やがて、夜が明けると、雪も止んだので、昼間の明るい間は、じーっと谷底の、みつ林のなかにかくれていました。が、また、夜が来て、すっかり暗くなると谷底を流れている小川の、氷がこびりついて、するするすべる岩から岩へ飛び渡って、こんどは、向こうがわの尾根へ、鳥の飛ぶようなはやさで、ぐんぐん一気に登ってしまいました。

そして、尾根の上まで登ると、星空が一面に広く開け、キラキラ星がまたたいて、北斗七星もはっきりと見られました。

「あっ、お星様だ——」

二才じかは、暗やみの谷底から出て来たことが、うれしくてうれしくてなりません。

母じかも、ほっとして…………

「どうやら、あしたは、よいお天気そうですね——」

と、父じかに言いました。

が、父じかは、これを打ち消すように、

「だが、今のわし達には、一寸先も見通しのきかないふぶきの方が、かえって、ありがたいのだが——」

父じかは、いつなん時、山犬が、飛び出して来るかも知れないので、まだ、なかなか心を許してはいません。

「でも、夜風が、こんなに吹いていますから、私達のおいも遠くへ飛び散って、少しは、安心じゃありませんか——」

「なあに、このへんでは、まだまだ、安心することは出来ないよ、さあ、少しでも早く、夜の明けないうちに、南のふもとへ下ってしまおう——」

そう言う父じかの言葉に、みんなは急いで尾根を下ると、こんどは、山犬のほらあなのある三国峠のふもとをさけて、ぐるっと遠回りして、また、明神峠をも上り下りして、東の空の白らむころには、酒匂川の上流へたどり着きました。

ここまで来ると、山がひくいので暖かく、雪も氷もとけて、春のような感じがしました。で、子じか達は、からだを母じかにすりよせて…………

「おかあさん、ここで少し、休んで行こう——」

「僕も、足がつかれた——」

子じか達は、長い旅のつかれで、口ぐちにそう言ってせがみましたが、こうした旅のけいけんを、たびたび持っている父じかは、ふぶきで足あとをかき消し、風でおいを吹き散らし、こんな遠い所までやって来ても、まだ山犬のついせきから、完全にのがれ去ったとは思われません。

で、父じかは、子じか達を元気づけるように…………

「みんな、もう少しだから、もう、一ふんばり、がん張るんだよ——」

と、きつく言いつけると、横合いから母じかが、子じか達へ助け舟を出して…………

「じゃア、元気に川を渡った者から、向こう岸でしばらく、休ませてやることにしましょう——」

と、父じかへ、そう言ってくれました。

それは、この長旅では、初めて旅をする子じか達にとっては、大変なことだろうと心配した母じかの心やりからでありました。

で、この母じかの、助け舟に元気づいた子じか達は、われ先にと、ザブザブ流れを渡って、足がら村に近いつつみの上へ登って行きました。

すると、そのつつみの上には、野じか達のすきな川やなぎの木やくわの木が、あたり一面に生えていました。が、まだ春が遠いので、葉を落とした枝の先の新しいめは、小さくかたくてめを吹いていません。ただ、つばきの木が、二、三本、早咲きの白い花を、美しく咲かせていました。

それで、母じかは、父じかに……

「子じか達も、お腹をすかしていますから、何か食べ物を——」  
と言うと、父じかも仕方なさそうに、

「それじゃ、私も、何かさがしてやろうか——」  
と、父じかと母じかとは、あちらこちら食べ物をさがしていますと……

それを待ち切れないで、子じか達は、つばきの木に近づいて、冬にもかれないつばきの青葉をむしり取ろうとしました。

これを見ておどろいた母じかは、すぐ、子じか達の方へかけて来て、

「つばきの葉は、すじがかたいから、食べるとお腹をこわします——それは、昔から、しかの食べ物じゃありません——食べてはだ目ですよ」  
と強く言って、首を横に大きくふって見せました。

母じかにしかられた子じか達は、

「ごめんよ、ごめんよ——」  
と、ベソをかきながら、しりごみしましたが、また、こんどは、つつみの上に、大きく枝を張ったえのきのみきに、ぐるぐるからみついているあけびの、かれそうにしわひた太いつるを見つけました。

それで、二才じかが、一番にかけ出して、かれづるをかじろうと、えのみきに近づいて行くと、さっきから、えのきの枝にかくれて、子じかをねらっていた大きな金茶色の毛なみをしたてんが、ふいに、二才じかの、のどもとめがけて、サッと、おそいかっかて来ました。

が、ねらいは外れて、二才じかのかた先を、ガックと、するどいは先で、かみつきました。

「いたいっ、いたいっ——」  
二才じかが、悲鳴をあげると、しゅう囲の子じか達は、思わず、パッと、みんな後へ飛び散りました。

だが、父じかと母じかはタ、ハ、ッと、すぐかけて来て、父じかは、

「この大づのが、目にはいらぬのか——」  
と、大きな枝づのを、ぐっとかまえて、てんをおどしつけました。

てんは、大づのにおどろいて、  
「うわあ、こりゃ、かなわん——」

そうつぶやくと、たじたじ後ずさりして、向きを変えたかと思うと、すぐ、ガサッガサッと、もとの木の枝へ、素早くかくれてしまいました。

前にも言ったように、父じかの大づのは、他のけものと争うためのものではありません。おすじかを表わすためのものでもありますから、あい手がにげれば、それでよいのです。父じかの方から追って行くようなことはしません。それよりも、てんにかまれた二才じかの、きずの手当てが大切です。

で、母じかは、二才じかを急がせて、

こうして、山犬が、全部こらしめられてしまうと、どこからともなく、野じかの家ぞくが現われて、しかの習かんであるうれしい時の感じを表す トン、トン、トンと、前足で地面をたたきながら、みんな金太郎のそばへ、からだをすりよせて行きました。

それで、ジロップも……

「おかあさん——」

と、ズイドウのなかから出て見ると、そこは、広い畑で、畑のうしろには高い丘があって、かやぶきの小さい家が建っていました。

そして、その家の前に、白がまじりのかみをたばねてうしろへ長くたらしめた金太郎の母が、山のなかでくらしている人とも思えないほど、きちんと着物をつつましく着て、やっと安心したと言ったほほえみをうかべ、金太郎や野じか達を見つめながら立っていました。

ツキノワのまき

5. 赤い花の悪ま

山々の雪がとけると……

春を知らせる足音のように、足がら山の谷川に雪どけの水が、ごうごう流れて——やがて、せせらぎの音ものどかに、さわやかな緑の風が吹き始めました。

そして、あたたかい光をあびて、まず、まっ先に、ゆきやなぎが芽を吹き、次につばきの花がほころんで、もくれんの花もいにおいをただよわせました。

川原のつつみに、つくしんぼうが頭を出すころには、若草も緑にもえて、ゆらゆらかげろうが立ちのぼっていました。

またそのころになると……

金太郎が、母と一しょに苦労してたがやした畑にも、黄色い毛せんをしきつめたように美しい菜の花が、丘一面にさきそろうと——黄ちょうやもん白ちょうが、春のまいをまって、ひらひらと花から花へ飛び回り、そして、みつばちや花ばちも、花畑の仕事に一生けん命精を出して、せっせと働いていました。

それから、また、しばらくたつと、丘の南がわの、たちばなの木にいっぱい白い花が咲いて、その木の根が持ち上げている地面の、デコボコ道で大勢の山ありが、ぼつぼつ春の仕事を始めようと、みんな助け合って、畑の肥料にやった川魚のほね切れを……

「えっさ、えっさ——」

と、かつぎ上げて、自分達のすへ運んでいました。

また、その少し前ごろから、冬眠のゆめから覚めた山々の動物が、長い間の空腹をみたそうとえさをあさりますが、なかでもむささびは、山一番の食いしんぼうで、なんでもかんでもコリコリ、コリコリかじります。

そして、夜になると、林の向こうから……

「カツカツカツカツカツカツカーラッ——」

と、ものすごいさけびを続けて、山のみんなをおそれさせます。

こうしたことが、しばらく続いて……

すると、ぼう切れが、山犬の横つらを、カーンとたたきつけたので……

「キャン！キャン！キャン——」

悲鳴をあげて山犬は、そこから十二、三メートルもはなれた太いみきのいちょうの根もとまで、からだごとにはね飛ばされてしまいました。そして、しばらくは、ぐったりたおれたままで、すぐには、起き上られそうもありません。

これを見ると——今まで、きばをむいてうめきながらも、じっと一と所に立って、ただ目だけ光らせて、回るぼう切れをにらんでいた母犬らしい、まっ黒な毛の山犬は、らんらんと光る青い目を、一そうするどくかがやかせて……

「よくも、むす子を——」

と、首の毛をさかだて、ぼう切れの回る速さに……

「ハーア ハーア——」

息を合わせていたかと思うと、

サッと、急に大きく飛んで、カクッと、ぼう切れにかみつきました。

が、けんのようにするどいきばでも、石のようにかたいかしの木のぼう切れは、かみくだくことが出来ません。それどころかかえってきょう犬のようにかみついた自分の力で、ボキッときばが、根もとから折れてしまっ……

「キャン！キャン！」

と、一声 二声、鳴き残して、すぐ一目散ににげて行きました。

で、ジロップも、少し安心して、ズイドウのなかから出て見ようと、二、三歩あるきかけると、ふいに、パッと目の前を、黒いかげが通り過ぎたので、思わず首を、ハッとちじめました。

が、よく見なおすと、そのかげは、はい色をした大きなおす犬で、初めは、おれが年寄りでも、けいけんがあるから人間なんぞに負けないぞ、と言ったおごりを顔にうかべ、金太郎を、ぐっとにらみつけたまま、くんくん鼻を鳴らして、ぐるぐる金太郎のしゅう囲を回っていました。

だが、この父親らしい山犬は、二ひきの失敗を知っているの、なかなかすぐには、おそいかかって行こうとはしません。

と言って、にげれば、すぐ、ふじづるがのびて来て、ぼう切れにたたきつけられるので、進むこともしりぞくこともできなくなっていました。

しかし、しばらく、ぐるぐる回っているうちに、犬の習せいも手つだって、むやみにかみつきたくなったのか——でも、そこは、老犬のこととて、長年のけいけんで、

「うう——」

と、一うなりうなるとはやてのように、す早く飛びこんで、あっと言う間に、サッと、ぼう切れにかみつきました。

が、金太郎は落ちつきはらって、少しななめ横にふじづるを、だんだん早く強く回したので、山犬は、ぼう切れをくわえたままちゅうにういて、ぐるぐるふり回され、その速度が加わると、クラクラッと目が回り、なんだか気まで遠くなりそうです。

そして、山犬が、すごい勢いで、上向きに回ろうとした時、

急に、金太郎が、

「えーい！」

と、さけんで、投げるようにしてふじづるを、ポイツとはなすと、山犬は、ちょうど鳥でも飛ぶように空中を大きく飛んで、向こうに見える丘をこえて、遠く見えなくなってしまいました。

「きずは、すぐ、きれいな水で洗わなきゃ——」

と、鼻先で、二才じかを小川までおして来て、流れなかへ横にねかせ、ジャブジャブきず口を、きれいに洗ってから、ペロペロした先で、きず口につばをつけてやりました。

けものつばは、きずのためによい薬で、さっきんざいの代りになるのです。

やがて、きずの手当てが終わると、また、父じかを先頭にして、野じかの家ぞくは、谷川ぞいに、しいの木やならの木の、ぞう木林をぬうようにして、すがたをかくしながら、上手へ上手へ進んで行きました。

が、二才じかは、かたのきずがいたむので、家ぞくから少しおくれて、ビッコをひきひきついて行くと、母じかが、心配して、時々後帰りして来ては……

「さあ、もう少し、元気を出すんですよ、いつものお前らしくもないではありませんか——」

と、頭で後から、おすようにして助けてくれました。

そこで、二才じかも、家ぞくからは、あまり遠くへはなれずに、みんなと一しょに、滝の下手の所までやって来ることが出来ました。

すると、その滝の下手は、尾根と尾根とにはさまれて両がわとも、急に、切り立った深いがけになっていて、こちらから向こう岸へ、長い杉の丸木橋がかかっていた。

父じかは、この丸木橋を見ると、

「かあさん、近くに、人間が住んでいるから、用心するんだよ——」

そう母じかに、そっと耳打ちすると、

「そうですね、こんな所に橋がかかっているのは、人間が近くに住んでいるしょうこです——」

と、母じかも、心配そうな顔つきをするので、父じかは、

「では、下手へもどるか、それとも、このまま上手へ登って行くか、どちらにする——」

そう相談すると、

「せっかく、ここまで来たのですから、このまま登って行きましょう——」

と、母じかの言葉に、相談がまとまって、二才じか以外は、子じかもみんな、その長い丸木橋を渡りました。

それは、野じかのひづめが、ふたまたに分かれているので、どんなまるい一本橋でも、平気で渡ることが出来たからです。

だが、ビッコの二才じかだけは、かた足とびでは危けんで、この長い丸木橋は、どうしても渡れそうもありません。

で、二才じかは、

「おかあさん、待って——」

いつもは、元気者でも、家ぞくが向う岸へ渡ってしまうと心細くなって、半泣き声で呼びとめました。

母じかも、こまったと言った顔つきで、

「おとうさん、どうしましょう——私達では、渡してやる事が出来ません——」

この母じかのオロオロ声に、父じかも、

「弱ったな、なんとかいい方法は、ないものだろうか——」

と、いくら考えてみても、しかの力では、丸木橋を渡してやれそうもありません。と言って、二才じかを残して自分達だけで、これ以上進んで行くことも出来ません。

で、母じかは、父じかへたのむような目つきをして……

「二才じかには代えられません。橋をもどることにしましょう——」  
と、言いました。  
それで、みんなもあきらめて、橋をもとへもどりかかると……… その時、下手の川ぞいの坂を、よく太った人間の子どもが、しばたばを山のようにかついで、二才じかのうしろの方——橋のたもとまで登って来ました。  
おどろいた野じか達は、  
「あっ、人間がやって来た——」  
と、みんなににげ出そうとしました。  
が、橋向こうの人間の子どもが、二才じかをかかえ上げようとするので、母じかは、たまりかねて………  
「おとうさん、二才じかが！」  
と、のどもさけるような声でさげびました。  
が、父じかは、その人間の子どものおだやかな目を見ているうちに、けもののかんで、この子どもは、野じかをいためるような悪い人間ではないように感じて、  
「まあ、そう、さわぐものではない——」  
と、言い聞かせているうちに——人間の子どもは、やさしく二才じかをかかえて、こちらへ丸木橋を渡してくれました。  
で、父じかと母じかは、かけよって………  
「ありがとうございました」  
「おかげ様で、二才じかが助かりました」  
と、二ひきが、かわるがわる礼を言うと、人間の子どもは、二才じかを地面におろしてやって………  
「この子じか、二才じかだね——ジロップだな——僕、金太郎と言う者だが、心配せずとも、君達をとらえたりはしないよ——さあこの滝の上の川原に湯が出ているから、ジロップのきずを、よく暖めてやると、すぐよくなる。早くそこへ、連れて行ってやるがいいよ」  
「えっ、この滝の上に、きずによくきく湯が出ていますって——」  
父じかが、そう言って聞きただすと、母じかもそばから………  
「それなら、おとうさん、早く二才じかを、そこへ連れて行ってやりましょう」  
と、どちらも、温泉のことをよく知っているようです。  
そうです。けものや鳥のなか間は、地面の底からわき出る温泉が、きずや病氣のために、大変よくきくことを、大むかしから自ぜんに知っていたのです。  
「それじゃ、この坂を左へ登ると近道だから、早く連れて行ってやるがいいよ——」  
と、金太郎は、道を指さしながら教えて………  
「さあ、僕も、おそくならないうちに帰らないと、おかあさんが心配する——」  
そう言い残すと、野じか達へ教えた道と反対に、坂道を右へとって、元気よく登って行きました。  
その金太郎を見送りながら母じかは、  
「人間にも、ほとけ様や神様のように親切な子がいるんですね——で、あの子の名前、なんとか言いましたね——そうそう、金太郎さんとか言いました——」  
と、うれしそうに言うと、父じかは、自分の感じは、間ちがっていなかったと言った口ぶりで………

と、また、大声で泣き出しました。  
だが、ジロップは、子じかでも、けもの習せいで、家ぞくの足あとだけは見落とすまいと、大きな目をまるく開いて、足あとをさがしながら行くと、がけに続いた山と山との間に、細い用水路があって、滝つぼから水が流れ出していました。  
そして、用水路に両がわから、ぞう木や、さゝむらがおおいかかって、昼でもまっ暗なズイドウになっていました。また、用水路には、深く落ち葉が重っていて、その下をくぐるように、きれいな水が流れていました。  
よく見ると、その水をにごらせて通った野じかや山犬の足あとが、落葉の上にうすく残っています。  
ジロップは、見うしなつたかと思っていた足あとの続きを発見したので………  
「おやっ——」  
と、思って、ズイドウのなかをのぞいて見て………  
「まっ暗やみだ」  
と、ちょっとしりごみしました。  
だが、すぐ、その後から、子どもらしいこうき心がわいて来て、思い切ってザブザブ、曲りくねった用水路をおそるおそる進んで行くと、急に目の前が、パッと明るくなって、まぶしくてまぶしくて、思わず目を閉じてしまいました。  
が、しばらくして、そっと目を開けて見ると、そこは、ズイドウの向う口で——その外では、三びきの山犬と人間の子どもが、はげしいたたかいはじめていました。で、ハラハラさせられながらもよく見ると、その人間の子どもは、自分をいたわって、丸木橋を渡してくれた金太郎だと分かりました。  
それで、じ——と息をのんで見守っていると——金太郎は、じょう夫なふじづるの先に、石のようにかたいかしの木のぼう切れをしっかりと結びつけて、それをぐるぐる水車のようにふり回して、山犬どもを追っばらおうとしていました。  
強い力の金太郎が、力一ぱいふり回すぼう切れに、三びきの山犬は、どうすることも出来ません。ただ、とぎすましたは物のようにするどいきばをむき出したまゝ、遠巻きにうなるだけで、ぐるぐる生きもののように回るぼう切れを見ていると、自分たちの目まで回ってしまいそうです。  
山犬どもにとっては、人間の金太郎よりも、ふじづるの先のぼう切れが、おそろしくておそろしくてなりません。  
ちょっとでも油だんをすれば、すぐ、ぼう切れが飛んで来るので………  
「ハーア、ハーア——」  
荒い息をつきながら、少しの休みもなく自分達の目も、ぐるぐる回していなければなりません。それで、山犬どもは、だんだん気がくるいそうになって来ました。  
それで、若い方のぶち毛をしたおす犬は、もう、しんぼうできなくなったのか、  
「ウゝゝ！——」  
と、きばをかんでねらいをつけ、ブルンと身をふるわせたかと思うと、パッと一ペンに、自分のからだの五、六ばいも飛んで、遠くからぼう切れへ、サツとかみついて来ました。  
が、それと同時に、  
「えいっ！」  
かけ声するどく、金太郎も、ふじづるを持った手首を、グッと急に、一たぐりたぐりました。

と、思いながら、暖かい空気をむね一ぱいにすっていると、いつからついてきたのか、父じかの後から、いきなりしジロップが飛び出して、畑のなかまでは行って行こうとするので……

「畑へ、はいってはいけない——畑を荒らすと、人間が、しかがりにやって来る——お前は、川原の湯で暖まって、一日でも早く、きずあとをよくするのだぞ——」

父じかは、そうしかりながら大づので、ジロップのからだをおすようにして、川原の小屋までもどってきました。そして、よく見ると、小屋は、ジロップが、こわしたままだと思っていたのに、もとのようにしゅうぜんしてありました。それで、だれが、しゅうぜんしたのであろうかと、ふしぎに思いながらも、小屋の近所で待っているはずの家ぞくが、一びきも見当たらないので……

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

声をはり上げて、家ぞくへ合図をしましたが……

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

こだまが、帰って来るだけで……

「—————」

家ぞくからは、なんの返事也没有せん。

それで、父じかは、心配で心配でたまりません。ジロップを湯に入れるひまもなく、けん命になって家ぞくのおいと、足あとをさがして、あちらこちらとかけ回りました。

そして、ようよう父じかは……

「あっ、足あとだ——」

と、滝の横道に、野じかの足あとを発見しました。

が、どうしたことでしょうか、大きな山犬の足あとが、野じかの足あとと入りみだれて……

「一っぴき、二ひき、三びき——」

さあ、大変です。

三国峠の山犬が、足がら山の滝の上まで、野じかの足あとを追って来たのでしょうか——とすると、野じかの家ぞくは、どうなっていることか、このままですと、おけば、どうされてしまうか分かりません。

と言って、年とった大きな父じかでも、なか間の協力がないかぎり、三びきの山犬にはかないません。しかし、父じかは、家ぞくのしどう者です。家ぞくを見ごろしにすることはできません。危けんをおかしてでも、みんなを救わなければなりません。

そう決心すると、父じかは、ただ、家ぞくを助けたいために、む中になって家ぞくの足あとを追って、滝の横道を一散にかけおりに行きました。

父じかが、いなくなってしまうと、いつも元気者のジロップも、急に心細くなって……

「おかあさん——どこへ行ったんだ——」

と、泣き出してしまいました。そして……

「僕、一びきになってしまっ、さびしいよ——」

と、父じかの後から、けわしいがけ道を、おそろおそろ一歩一歩用心しておりに行くと、ちょうどその下は、滝つぼでゴーゴー雪どけの水が、高いしぶきを立てて落ちていました。

こんな大きな滝を初めて見るジロップは、なんだか滝つぼへ、すいこまれてしまいそうな気がして、冷たいしぶきがかかると、首をちじませて、ぶるぶる足までふるえて来ました。

そして……

「おかあさん——」

「人間がみんな、悪者ばかりとはかぎらないよ——私は、あの子の目を見た時から、なんだかよい子だと感じていた——それに、あの子は、二才じかのことを、ジロップとか言ったようだったな——私達も、これから、二才じかのことを、ジロップそう呼ぼうじゃないか——」

「それがいいですね、二才じかのために、おん人が、つけて下さった名前ですもの——」

「うん、そうしようしよう。これからは、みんなにも、そう呼ばそう——では、早く、滝の上まで急ぐことにしようじゃないか——」

と、にげかけた子じか達を集めて、左がわのがけ道を、滝の上手へ登り切ると、広い川原へ出て来ました。

すると、ふいに、目の前の草むらから、バタバタと羽ばたきの音が聞こえたかと思うと、この鳥が二羽、パッと飛び立って、りっぱな白いつばさを広げ、高い一本松の一番上の枝に作っている自分達のすへ、ゆうゆうと飛び去って行きました。

そして、その草むらから、ほかほかと湯気が、白く立ちこめていました。

「あっ、湯が出ている——暖かそうな湯が、あんなに一ぱい出ている——」

父じかは、温泉を見つけて、思わず、大声でそう言いました。

母じかも、それから、ホッとしたように……

「これで、ジロップのきずも、すぐなおせます——さっきの、この鳥も、どこかからだが悪いので、暖まっていたのでしょう——」

と、もう、ジロップのきずがなおったような喜び方です。

そこで、父じかと母じかは相談して、いっそのこと、この川原の向こうの、はぜの木やかえでの木のチラホラ見えているぞう木林に、わし達のすを作ろうかと話合いましたが、なお、あたりを見回していると、一段と深い草むらのかげに、思いもよらない小屋がけがありました。

その小屋は、人間だけが持っている——は物と言うものを使って、森から木を切り出し、柱を建てて横木を渡し、雨つゆのかからないように、かやの葉で屋根をふいて、また、寒さや風をふせぐためにしゅう囲にかこいまで作ってありました。

そして、小屋のなかには、川原の石を積んで湯つぼを作り、温泉のわき出ている所と川の流れから、太い竹のふしを通して、二本のといを渡し、温泉と水とを湯つぼへ流しこんでありました。

それで、母じかは、足先で湯かげんを知ると、

「ジロップを、ここでゆっくり暖めてやりましょう——」

と、ジロップを湯つぼへ入れようとしたのですが、父じかは、声をひくめて、

「この小屋は、人間の作ったものだから、早く暖まって行かないと、人間に見つかれば、とらえられるかも知れないよ——」

そう言って、他の子じか達にも、早く湯へはいるようにせかせました。

で、母じかも、急いで、自分の鼻の先でジロップのからだをおすようにして……

「さあ、早く、きずを暖めなければ、人間が、お前を取りに来ますよ——」

と、言いながら……

親じかが、二ひきして、早く湯へ入れようとしますが、子じか達は、初めて見る湯気におそれて、なかなか湯つぼへはいるとはしません。

そのうえ、なに思ったのか、ジロップは、母じかの下をかいくぐるようにぬけ出して、小屋の柱と横木とを結びつけてあったふじつるをかみ切ったので、バサッと、小屋が、横にたおれてしまいました。

びっくりした母じかが、  
「これ、ジロツポ」  
と、言うのもまたないで、父じかも、  
「お前、なにをするのだっ」  
と、思わず、声を大きくしました。

しかし、こうなると、しかの力では、小屋のしゅうぜんが出来ませんから、人間に知れないうちに、早くにげ出そうと思って、父じかと母じかは、すぐ、子じか達を連れて小屋から飛び出しました。

が、父じかは、この小屋がけをした人間が、小屋をたおしたことを知れば、かならず自分達をとらえに来るだろうと心配になって……

「人間に見つかるの大へんだから、みんな急いで、川原を走るんだ——」  
そう命れいするように言うと、みんなもおそろしいのか、つかれていた子じか達まで、小石のゴロゴロ多い川原をピョンピョンかけて、ぞう木林のなかへ、すがたをかくしてしまいました。

そして、ぞう木林のなかでも、足あとを残さないように、ところどころ雪の残った深い落ち葉の上の雪をさけながら、林の向こうへつきぬけると、そこは、高いがけの下で、そこからは、急にけわしい尾根がせまっていたので、父じかと母じかは、もう歩くこともいやがる子じか達を連れていては、この尾根ごえは無理だと思って——尾根のすそにそって、子じか達をしっかりと追いついて追いついて、日当たりのいい雪のとけた道を、自分達の足音を気にしながら、しばらくみんなで進んで行きました。

すると、その行手をはばむように、尾根のすそから一面に、せたけよりも高いささむらが、うっそうとおおいげっていたので、もうこれ以上進むことが出来なくなってしまいました。

それで、野じか達は、ちょっとこまっていたが、あちらこちらかけ回った父じかが、そのささむらの地面を二つに分けて流れている細いさわの流れを見つけ出してくれたので、みんなは、ささむらの下をくぐるようにして、浅いさわの流れをさか上って行くと、思いもよらないくぼ地にぬけて来ました。

そして、そのくぼ地は、尾根に続く北がわに、かえでの木のいっぱい立ちならんだ丘があって、東と西と南の三方は、高いささむらが、深いかき根を作っているように、ぐるっとくぼ地を取りかこんで、くまざさが、冬で黄色くなっていましたが、のぞきこむすき間もないほどはえていたので、外からは少しも分かりません。で、ここなら、そうかんたんに、人間や山犬にも発見されないだろうと思いました。

また、南がわのすみには、秋の末ごろから散り始めたかえでの葉が、丘の上から吹きよせられて、ちょうどよいねどこまで出来ていました。

そこで、父じかと母じかが、なおもよく、あたりを調べてみると、丘の向こうがわと尾根との分かれ目の、がけとがけとの岩の間からわき出ているいずみの水が、にじむようようくぼ地へ流れこんで、また、ここでも、いくつかの、きれいなさわを作っていて、飲み水はじゅう分だし、一番下の水だまりでは、からだを洗うことも出来ました。そして、さわのほとりがしめっているの、まだ冬だと言うのに、地ごけや、岩ごけが青々と、ささむらの下まで生え広がっていました。

で、父じかは、  
「ここに、わたし達のすを作ろうと思うが——」  
と、相談を持ちかけると、母じかも喜んで……

「ここなら、いいでしょう——冬の間でも、家ぞくの食べ物には不自由しませんもの——」

「そうだよ、それに、さわの流れをにごさないよう通って出入りすれば、足あとも残らないから、こんな深いささむらのおくに、わし達が住んでいるとは、人間も山犬も気がつくまい——また、夏には、さわのどろや、すなをからだにぬって日にかわかせば、蚊やぶよなどの、悪い虫をふせぐことも出来る——こゝは、わし達野じかのすを作るには、またとないよいくぼ地と言うものだ——」

そう言った父じかは、三日ぶりで、少し気もほぐれて、ほがらかな気分になったようです。

#### 4. なわを回して

野じか達が、くぼ地にすを作った初めの間は、ジロツポは、まだきずがいたむので、いつも母じかのそばでうずくまっていたましたが、十日あまり過ぎると、ジロツポのきずは、もとのようになおってしまいました。

そうなると、いつも元気なジロツポは、くぼ地などで、じっとねてはられません。

いたずら子じかのジロツポは、  
流れの水でジャブジャブと  
きれいに毛なみを洗ったが  
どろんごっこでどろまみれ  
さぁ 大変 しかられる  
ヒーヨヒーヨ ヒーヨヨ

いたずら子じかのジロツポは  
すました顔して森の道  
ひづめ自まんでかけ過ぎて  
かあさん所へ帰れない  
さぁ 大変 どうしよう  
ヒーヨヒーヨ ヒーヨヨ

(曲譜スカウティング誌五八号一頁)

こんな平和な日が、いく日か続くと、急にかけ足で春がやって来たように、雪や氷がとけ始め、滝の流れが、ひびきを立てて春を呼んでいました。

だが、野じか達は、ここへ来てからまだ、一度も人間に出会ったことがありません。それで、みんな人間をけいかいしながら、若草をさがして、温泉の出る川原のつつみまで出て行きました。

そして、父じかだけで、もっとあたりの様子をよく知っておきたいと思って、つつみづたいに川を少しさか上がってから、ジャブジャブ水かさの増した川原を向こう岸へ渡ると、そのつつみに続いた丘一面に、人間のたがやした広い畑がありました——そして、まかれた種が、春を知ったのか、土の下からむくむくと、強い力で地面を持ち上げようとしていました。

で、父じかが、  
「もう、すぐ、春だなあ——」